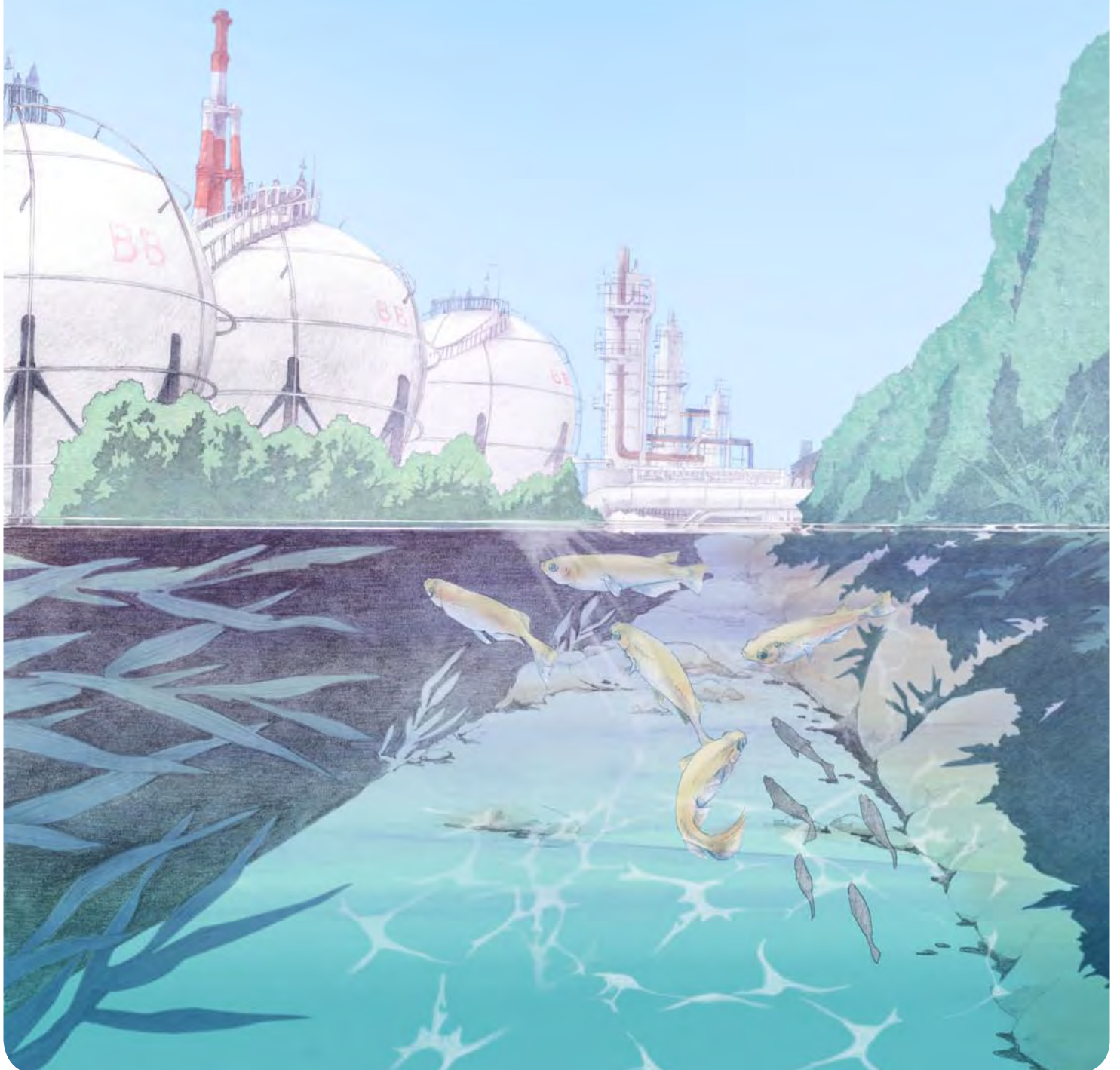


JSRグループ

# CSR

Report 2013



JSR株式会社





生活者の皆様が手にするさまざまな製品には、目に見えない場所、意識していないところにも、数多くの「素材＝マテリアル」が使われています。暮らしの役に立つもの、世の中をより良くするための製品を下支えているのが、化学産業の力です。

JSR グループは、化学の力でマテリアルの新たな可能性を追求し、社会の発展に貢献することで、自らも成長し続ける企業でありたいと考えています。



## 編集方針

良き企業市民として誠実に行動し、社会の信頼に応えていくための取り組みがJSRグループのCSR (Corporate Social Responsibility: 企業の社会的責任) です。

本レポートは、持続可能な社会の実現に向けたJSRグループの方針と取り組みについて、すべてのステークホルダーの皆様にご報告することを目的としています。

2013年度版では、特集でJSRグループの事業と社会のかかわりを俯瞰したうえで、特に戦略事業分野における取り組みについて詳しくご紹介しています。さらに社外有識者と当社役員のダイアログを実施し、JSRグループのCSRについて大局的な見地から語り合いました。活動報告については、経営方針「ステークホルダーへの責任」別にまとめています。

また、取り組みと報告書に対する評価として、第三者意見(冊子・Webに掲載)と第三者検証(Webに掲載)をいただいています。

## 本レポートの構成

「CSRレポート2013」は、冊子とWebで発行しています。

### Web版

JSRグループのCSRの取り組みを、網羅的に報告しています。冊子版の報告に加え、レスポンシブル・ケア(環境・安全・健康)活動など各ステークホルダーへの責任について、より詳しくお伝えしています。

### Web

HOME > CSR情報 > CSRレポート2013

<http://www.jsr.co.jp/csr/csrreport2013.shtml>

### 編集方針

### トップコミットメント

#### 特集1 未来へつなげるものづくり

#### 特集2 社会との対話 ※全文を掲載しています

### JSRグループについて JSRグループ概要／企業理念体系

### マネジメント CSRマネジメント／コーポレートガバナンス／コンプライアンス／リスク管理／目標・実績一覧

### グローバル各社の取り組み

### ステークホルダーへの責任

#### 顧客・取引先

顧客・取引先に対する安全確保／化学品安全／グリーン調達への取り組み／CSR調達

#### 従業員

人事制度の基本方針／行動指針「4つのC」／多様な人材の採用と登用／ワークライフマネジメント／社員とのコミュニケーション／人材育成の取り組み

#### RC (レスポンシブル・ケア)

RCマネジメント／マテリアルフロー／地球温暖化防止への取り組み／資源の有効利用／環境負荷低減への取り組み／安全への取り組み／グループ企業のRC活動

#### E2イニシアティブ®

#### 生物多様性保全

#### 地域・社会とのかかわり

#### 株主

### 第三者意見／第三者検証

### ガイドライン対照表

### レポートダウンロード

### 参考にしたガイドライン

- GRI (Global Reporting Initiative) 「サステナビリティ・レポート・ガイドライン (第3版)」
  - 環境省「環境報告ガイドライン (2012年版)」
  - 一般社団法人 日本化学工業協会 「化学企業のための環境会計ガイドライン」
  - 環境省「環境会計ガイドライン2005年版」
- ※GRIガイドラインと本レポートの対応については、Web版で公開しています。

### Web

CSRレポート2013 > ガイドライン対照表

### 対象期間

2012年4月1日～2013年3月31日  
(報告の一部に、2013年4月以降の活動と取り組み内容も含まれます)

### 対象範囲

JSR株式会社およびグループ企業38社  
●RC(環境・安全・健康)報告のデータ収集範囲  
四日市工場、千葉工場、鹿島工場、四日市研究センター、精密加工センター、筑波研究所、国内グループ企業14社\*1、および海外グループ企業9社\*2

\*1 P26「JSRグループ一覧」の※印参照

\*2 上海虹彩塑料有限公司／日密科優橡膠(佛山)有限公司／天津国成橡膠工業有限公司／錦湖ポリケム(株)／Elastomix (Thailand) Co., Ltd.／JSR Micro N.V.／JSR Micro, Inc.／JSR Micro Korea Co., Ltd.／JSR Micro Taiwan Co., Ltd.

### 発行情報

発行日 2013年8月  
次回発行予定 2014年7月  
(前回発行 2012年8月)

### 冊子版

JSRグループのCSRの取り組みの中から、ステークホルダーの皆様特に伝えたい項目と、2012年度のハイライトを報告しています。

## 目次

### 03 トップコミットメント

#### グローバルな課題を解決する Materials Innovation

##### 特集1 未来へつなげるものづくり

#### 05 マテリアルが持つ可能性

#### 07 積み重ねた技術力が、 新しい事業領域を切り拓く

#### 09 医療の現場に変革をもたらす マテリアルの力

##### 特集2 社会との対話

#### 11 JSRグループのCSRを 革新し続けるために必要なこと

### 15 JSRグループの 企業理念体系とCSR

### 2012年度活動ハイライト

#### 17 グローバル各社の取り組み

#### 19 ステークホルダーへの責任

### 21 目標と実績

### 25 社外からの評価

### 26 JSRグループ概要

### レスポンシブル・ケア®

(本レポートの中では「RC」と表記します)

レスポンシブル・ケアとは「化学物質を製造し、または取り扱う事業者が、自己決定、自己責任の原則に基づき、化学物質の開発から製造、流通、使用、最終消費を経て廃棄に至る全ライフサイクルにわたって『環境・安全』を確保することを経営方針において公約し、安全・健康・環境面の対策を実行し、改善を図っていく自主管理活動」をいいます。





# 変化し続ける時代を見通しながら、 「Materials Innovation」で 人間社会への貢献に挑戦します。



## 時代の変化を捉え、成長シナリオを描く

JSRグループでは、2020年のありたい姿を描き、2011年度からの3カ年を「成長への始動」と位置づけた中期経営計画「JSR20i3」を進めてきました。この間、リーマンショックに端を発した「不確実性」と「多様化」を時代のキーワードと考えてきましたが、2012年度以降、世界が新しい枠組みを迎えつつあるサインを感じています。その兆候のひとつが「シェールガス革命」です。シェールガスの安定的な生産・調達が可能になれば、原料の多様化と地政学的なバランスの変化が間違いなく訪れます。また世界景気も、今後は悪化よりも好転の可能性が高く、この機会を確実に捉えなければなりません。2014年度をスタートとする次期中期経営計画では、今後数年で起こり得るこうした変化を敏感に捉え、確固たる成長シナリオを構築していきます。

私たちの基盤事業のひとつである石化事業では、量・価格ともに安定した原料の調達が事業の成否を左右します。主要原料であるブタジエンの安定的確保は将来にわたっても課題です。これまで用いられていなかったブタジエン原料の活用に加え、合成ブタジエンの製造技術も開発中です。実はJSRでは、40年ほど前に合成ブタジエンを研究していました。しかし当時は資源問題は社会課題になっておらず、経済合理性の観点から有効とは考えられていませんでした。過去から続く研究開発の蓄積が、今この時代に、新しい価値を生み出そうとしているのです。

もうひとつの基盤事業であるファイン事業は、日本中心の事業形態からの転換が迫られています。市場の変化を捉えながら、フラットパネル・ディスプレイ材料は韓国・台湾を中心に、半導体材料はグローバルに、顧客のニーズに応じていく必要があります。

ふたつの基盤事業は収益の要ですが、今のままの連続的な成長だけでグローバルに存在感のある地位の獲得は困難です。私たちがさらなる成長を遂げるには、地球規模の課題解決に役立つJSRグループの素材や技術を次の事業の柱として確かなものにする必要があります。

## 社会課題の解決を成長のドライバーに

この新しい柱が「戦略事業」です。石化事業やファイン事業を通じて蓄積した数々のオンリーワン技術や品質管理の手法を活用し、融合することで、グローバルな課題の解決に貢

献できると確信しています。

戦略事業では「精密材料・加工」を共通の基盤技術としています。JSRが持つ素材に、どんな機能を付与し、どうやって高精度な加工をするか。その掛け合わせで、単なる素材を提供するよりも高い価値を生み出すことができます。そしてその技術力をベースに、「環境・エネルギー」と「ライフサイエンス」のふたつの分野で事業を展開しています。

環境・エネルギーの領域で主軸に据えているのは、省エネルギーやエネルギー回生、蓄熱、遮熱など、最終的に電力消費を下げることにつながる分野です。特に力を入れているリチウムイオンキャパシタは、電極の性能や安全性を向上させるために独自の精密加工技術を活かし、より高性能の製品づくりを目指しています。また遮熱塗料用材料などは、以前から研究していた技術を改良して製品化につなげました。このような製品群は、環境配慮と事業を結びつけるJSR独自のコンセプト「E2イニシアティブ®」で掲げた「Eco-innovation」とも合致しており、積極的に取り組んでいきます。

一方、ライフサイエンスの領域では、2012年2月にJSRライフサイエンス株式会社を設立しました。これまでも医療用ポリマーや診断薬用粒子の製造・供給を行っていましたが、抗体医薬の精製工程で用いるバイオプロセス材料の提供にも業容を拡大します。創薬のプロセスは高い品質や安全性が求められますが、半導体材料事業などで培ってきた品質管理や製造技術のノウハウがここに応用できます。ライフサイエンスと半導体、一見関係がなさそうなふたつの技術を融合して利用者の利便性を高めるチャレンジが進んでいます。これらを積み重ね、将来的には薬の製造コストを下げた安価な医薬品の製造に貢献したり、一人ひとりに最適化した治療や投薬を行うパーソナル医療の進展に貢献することで、企業理念「Materials Innovation」を実践していきます。

また、生物多様性の保全については、2012年度に策定した全社方針のもとで取り組みを着実に推進しながら、どのように事業活動に組み込んでいくかさらに検討を進める予定です。

## 多様な従業員一人ひとりの挑戦が、未来を創る

石化事業からファイン事業、戦略事業へと事業分野も活動地域も拡大を続ける中で、人材の育成は経営のナンバーワン課題です。

これまでの事業を通じて、グローバルな視点で仕事に取り組むというマインドセットが従業員一人ひとりに徹底してきたと感じています。企業理念体系の浸透を目指した役員と従業員の対話会



も繰り返し行い、認知も進みました。今後は、行動指針「4C」のChallenge(挑戦)、Communication(対話)、Collaboration(協働)、Cultivation(共育)の実践がまず

まず重要になると考えています。例えばライフサイエンスの分野では、研究機関との連携や他企業への戦略的投資を積極的に行っており、さまざまな社外パートナーと力を合わせた取り組みを推進しています。互いの意見を尊重し合いながら新しいビジネスモデルを築くには、ChallengeやCollaborationの重要度はさらに高まります。

加えて、多様な価値観への理解も不可欠です。現在、グループ人員約5,800人のうち約1,200人が海外拠点の従業員で、その比率は今後ますます高まっています。女性の活躍や中途採用者の活用も推進しています。さまざまなバックグラウンドを持つ従業員が、実力次第で管理職や経営幹部にチャレンジできる機会をつくることが経営陣の役割だと考えています。同時に、会社と共に成長し続けようと強くコミットする従業員に対して報いることができるような仕組みの導入も検討しているところです。

## 持続可能な社会の実現に向けて、 価値創造の挑戦を続ける

2012年11月、四日市工場の乳化重合SBRプラントで火災が発生しました。幸い負傷者はなかったものの、近隣住民の皆様や関係当局に多大なご迷惑をおかけいたしましたこと、改めて深くお詫びを申し上げます。日頃から安全活動に取り組んでいましたが「安全に絶対はない」と改めて思い知る機会となりました。

JSRグループは、国連グローバル・コンパクトに参加し、グローバルに事業活動を展開する企業グループとして国際社会の中で、より責任ある行動の実践を目指しています。

2013年3月には、米国のグループ企業であるJSR Micro, Inc.が『2012 CSR Report』を発行しました。JSRグループのCSRレポートに触発され、社会に向き合うことが競争力になると自覚し自主的にレポートをまとめたのは、非常に喜ばしいことです。こうした意識や行動が、グローバルに展開していくことに期待しています。

JSRは半官半民の企業としてスタートし、他の企業グループに属さない企業として独立性を維持してきました。今後、グローバルな競争を勝ち抜き、JSRグループとしての個性を持って存在感を示していくためには規模の拡大が必要で、時価総額1兆円規模で評価される企業となることを目指しています。この高い目標を達成するには、今までの考え方やビジネスモデルまでも変革し続ける覚悟です。持続可能な社会の実現への貢献と、JSRグループのたゆみない成長を目指して、私たちは「Materials Innovation」による価値創造への挑戦を続けていきます。

JSR株式会社 取締役社長

小柴 満信



# マテリアルが持つ可能性

JSRグループのマテリアルは、さまざまな製品の素材として使われています。さらに今、石油化学系事業やファイン事業などで培ってきた技術や人材と、グローバルに社内外の力を結集することで、環境・エネルギーやメディカル材料など、社会課題の解決を目指した新しい事業に、戦略的に取り組んでいます。

僕の名前はエコ分子くん。  
僕が付いているものは、  
JSRグループの  
環境配慮型製品です。  
(E2イニシアティブ®浸透イメージキャラクター)

**リチウムイオンキャパシタ**  
風力、太陽光など自然エネルギーによる発電の効率的な利用や、回生エネルギーの取り込み等、瞬間的に大きなエネルギーを充放電できるリチウムイオンキャパシタを開発・販売しています。

**ABS系樹脂**  
耐衝撃性と剛性のバランスが良く、光沢と色調に優れ、成形しやすいABS樹脂は、自動車部品や工業用品、電気機器などさまざまな用途で使われています。

**熱可塑性エラストマー (TPE)**  
加熱すると柔らかくなって容易に成形加工でき、リサイクル性にも優れたTPE。スニーカーなどの靴底や粘・接着剤、アスファルト改質材などに用いられます。

**スチレン・ブタジエンゴム**  
JSRは自動車タイヤ用合成ゴムの国内シェアナンバーワンのメーカーです。低燃費タイヤ用に開発した合成ゴムで、独自の構造によりタイヤに使用したときのウェットグリップ性能と転がり抵抗性能を両立させて、タイヤが原因となる燃費ロスを小さくします。

**紙塗工用ラテックス (PCL)**  
雑誌やパンフレット、美術印刷などに用いられる塗工紙には、強力な接着性と優れた印刷適性を有するPCLが表面加工の際に使用されています。

**LCD材料**  
液晶テレビやパソコン、スマートフォンなどの各種ディスプレイに使われる配向膜、感光性スペーサー、着色レジスト、保護膜、反射防止膜等が高い評価を受けています。

**半導体材料**  
IT機器の心臓部を構成する半導体。その製造に欠かせないフォトリソグレイブ材料やCMP材料、実装材料などのマテリアルを提供しています。

**サーマルマネジメント材料**  
保冷・空調設備で使われる潜熱蓄熱材料や、塗料に用いて建物の遮熱性能を向上させる樹脂など、熱をコントロールして省エネや快適な環境づくりに貢献する素材を提供しています。

**タッチパネル用シート/フィルム**  
JSRが独自開発した耐熱透明樹脂「アートン®」フィルムに表面処理や透明電極加工などを施し、スマートフォンやカーナビゲーションのタッチパネル用フィルムとして提供しています。

**診断薬用粒子**  
高分子技術をベースにJSRが開発したポリマー微粒子は、体外診断薬の原料やバイオ研究用の分離・精製材料などに活用されています。

**ポリブタジエンゴム**  
耐摩耗性、動的特性、低温特性に優れ、加工性にも優れた合成ゴムで、大型車両のタイヤや各種工業製品、ゴルフボールなど幅広い用途に活用されています。

**通信用光ファイバー**  
インターネット、長距離通信などに欠かせない光ファイバー。国内で製造される光ファイバーケーブルの多くに、JSRの光ファイバーコーティング材が使われています。

## ① エラストマー

合成ゴムの総合メーカーとして誕生して以来、タイヤ用ゴム、TPE、エマルジョンなど幅広い石油化学製品で暮らしを彩っています。

## ② 合成樹脂

柔軟な製品設計の技術力によって生み出された、ユニークな特徴を持つABSをはじめとする合成樹脂を世界中のユーザーに提供しています。

## ③ 電子材料

絶え間ないイノベーションを続けるエレクトロニクス製品。その進化を支える半導体のさらなる微細化・高集積化のカギを握っています。

## ④ ディスプレイ材料

フラットパネル・ディスプレイ (FPD) 材料のトータル・マテリアル・サプライヤーとして、多彩な技術で業界をリードしています。

## ⑤ 光学材料

広く普及している光ファイバーによる高速データ通信。それを光ファイバーのコーティング材などの光学材料技術が支えています。

### 戦略事業

## ⑥ 精密材料・加工

独自開発した素材をベースに、薄膜形成や精密加工技術によって、マテリアルの価値を最大化しています。

### 戦略事業

## ⑦ 環境・エネルギー

環境・エネルギー分野の新技术に必要な材料開発に取り組んでいます。マテリアルの可能性を追求し、持続可能な社会の実現に貢献します。

### 戦略事業

## ⑧ メディカル材料

マテリアルテクノロジーとグローバルネットワークを通じて得られた最新の技術を織り込んだ革新的材料が、ライフサイエンスの未来を切り拓きます。



# 積み重ねた技術力が、新しい事業領域を切り拓く

## 絶え間ない事業創造から「新しい事業の柱」を築く

日本での合成ゴム国産化を目指し、1957年に日本合成ゴム株式会社として設立されたのが、JSRグループのスタートラインです。以来、石油化学分野でトップレベルの製品を数多く提供してきました。1990年代には、光・電子材料などのファイン事業分野に業容を拡大。石油化学系事業分野で培った高分子技術などを応用し、事業の多角化に取り組んで、高い収益とシェア確保を実現しました。これらは基盤事業として、今日のJSRグループを支えています。

2010年代に入り、JSRグループの成長とともに、企業理念「Materials Innovation」を実現して社会に貢献することの重要性が増しつつあります。そこで「精密材料・加工」「環境・エネルギー」「メディカル材料」の3分野を「戦略事業」と位置づけ、事業の拡大を進めています。折しも、リーマンショックや東日本大震災など、経済やサプライチェーン、エネルギー問題などに大きな影響を及ぼす急変があり、ビジネスのあり方や社会のニーズも変化しています。そうした環境変化にも対応し、技術力を活かして継続的・安定的に成長できる企業を目指していきます。

## 既存の技術や人材と社外・グローバルの力を結集

戦略事業では、JSRグループの持つ既存技術や、研究開発で見出した「イノベーションの種」をいかに事業に結び付けるかが重要です。そこで、研究開発部門のトップが戦略事業部門の責任者も務め、両部門が密接にかかわり合いながらスピーディに決断できる体制をとっています。研究者が直接顧客のもとに伺ってニーズを掘り下げるなどの活動も盛んに行っており、研究開発と事業の一体化が加速しています。

また、分野によって最先端の研究が北米で行われているものやヨーロッパ中心のものがあり、戦略事業の各ビジネスで重点となる国・地域は基盤事業と異なっています。このため、研究開発や営業の拠点を最先端エリアに置き、最新の動向を迅速に捉えることができる体制も整えつつあります。加えて、戦略事業の推進に必要な極めて専門性の高い技術や知識をスピーディに獲得するため、業務提携や戦略的投資を積極的に行っています。こうした取り組みにより、社内外の専門知識や技術を集結させ、社会に新しい価値を提供できる製品づくりを進めています。



**渡邊 毅**  
執行役員  
戦略事業企画部長(当時)

## 戦略事業という「新しい土地」でビジネスを進める難しさとやりがい

これまで基盤事業では、特定の顧客と深くかわりニーズに応え、技術を擦り合わせる「One-on-One」がビジネスの基本でした。しかし戦略事業では、販路や顧客とのチャンネルがないところからスタートし、なおかつターゲットはグローバルに据えています。ですから、今までのマインドセットを変えなければと強く感じています。その実現のために、JSRグループの行動指針「4C」の実践が不可欠です。

また戦略事業は、省エネルギーや創業支援など、

将来的により大きな社会課題になるであろうテーマにフォーカスしています。社会への貢献とビジネスが一体化していることが、さらなるやりがいにつながっています。

中期経営計画「JSR20i3」の期間を通じて、戦略事業の基礎的な技術や外部との連携などはできがわつつあります。計画最終年にあたる2013年度は、ここまでの蓄積を活かして実行あるのみ、という遂行の年と位置づけ、挑戦を続けています。

## 戦略事業の3つの領域

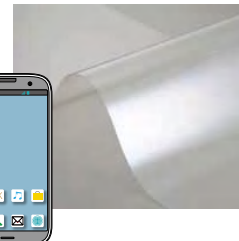
### 精密材料・加工

JSRグループが持つ独自の素材技術に、機能性と加工技術を掛け合わせて世の中に新しい価値を提供するのが「精密材料・加工」分野です。ここで生み出される技術は、他の2つの戦略事業の基盤にもなります。

情報機器や精密機器は常に「より軽い、より薄い」製品を目指しており、材料レベルでの革新が求められています。素材をよく知るメーカーだからこそできる技術の組み合わせで、こうしたニーズに応えていきます。

### ARTON®/OPSTAR®/ELART® (アートン/オプスター/エラート)

優れた光学特性と耐熱性を持つ透明な「ARTON®」フィルムや反射防止コーティング材料「OPSTAR®」に、精密加工技術を融合して生まれたタッチパネル用透明導電性フィルム「ELART®」。ガラスなどに代わって、スマートフォンのタッチパネル等に使われています。

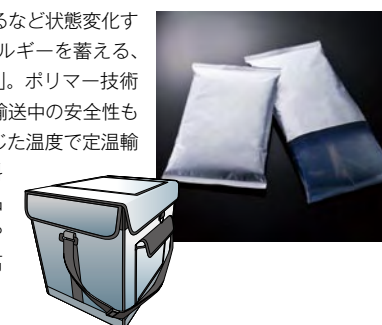


### 環境・エネルギー

石油化学に事業基盤を置くJSRグループは、限りある資源を効率よく使うことや、省エネルギーに貢献することが重要であると強く認識しています。そこで、ポリマー技術や素材の力を活かして、エネルギーをコントロールするための製品を提供しています。

### CALGRIP®(カルグリッパ)

物質が固体から液体に変わるなど状態変化する際に放出・吸収するエネルギーを蓄える、潜熱蓄熱材料「CALGRIP®」。ポリマー技術でパラフィンを固体化し、輸送中の安全性も向上しています。用途に応じた温度で定温輸送に使えるため、生鮮食品やワクチンなどの医薬品の定温輸送材、また建材や空調等への応用で期待が高まっています。



### SIFCLEAR®(シフクリア)

耐候性や耐汚染性を向上させ、遮熱効果を持続させる材料が「SIFCLEAR®」です。東日本大震災被災地の仮設住宅に「SIFCLEAR®」を使用した遮熱塗料を無償で施工しました(写真)。東南アジアなど直射日光による温度上昇が課題となる地域でも活用いただけるよう、実績を重ねています。



### BIOLLOY®(バイオロイ)

植物由来材料のポリ乳酸と、熱可塑性樹脂を複合化したバイオ樹脂「BIOLLOY®」。既存の一般的なバイオ樹脂に比べて5倍の耐衝撃性を持つのが特徴です。薄くて軽く地球にやさしい素材が求められている化粧品やシャンプーなどのボトルのほか、自動車内装、OA機器や家電等、さまざまな用途での活用が見込まれています。



### ULTIMO®(アルティモ)

長寿命で電気を瞬間的に溜めたり放出することを得意とする蓄電デバイスであるリチウムイオンキャパシタ「ULTIMO®」。工場などの瞬時電圧低下対策に使われたり、建設用機械が回ったり止まったりする際に発生するエネルギーを効率的に再利用するために採用が進んでいます。燃費の大幅な向上など自動車の高性能化にも活用できるよう、研究を進めています。



### メディカル材料

### 次のページへ

健康や医療に対するニーズはグローバルでますます高まっています。JSRグループは、従来から展開している医療用ポリマー材料に加え、製薬メーカーや研究機関が薬をつくったり、治療法を開発するための手助けとなる「創薬支援」の分野で、素材や技術を活かした貢献をしていきたいと考えています。

### 精密材料・加工

## 戦略事業

新しい時代のニーズを反映した新しい価値の提供

### メディカル材料

### ファイン事業

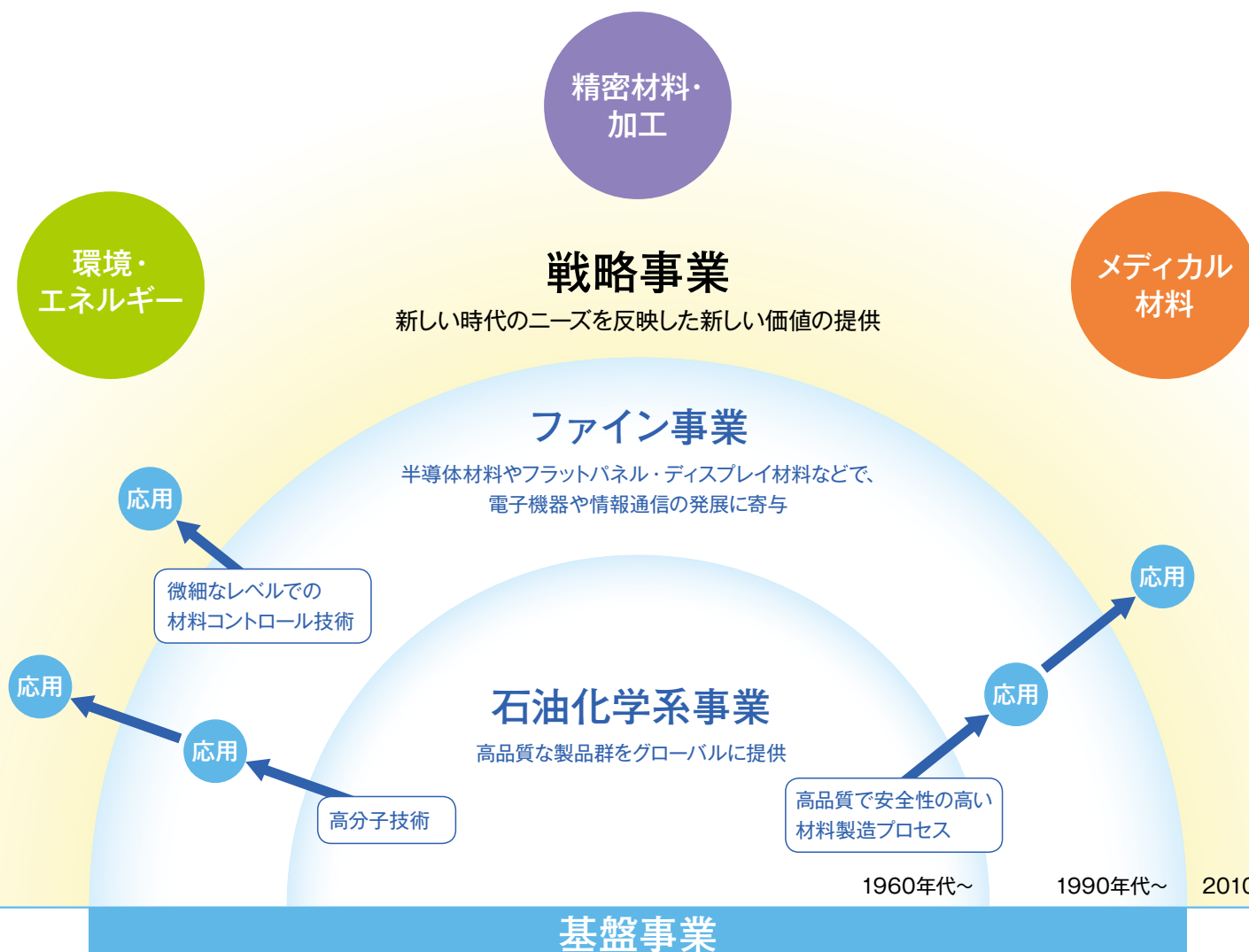
半導体材料やフラットパネル・ディスプレイ材料などで、電子機器や情報通信の発展に寄与

### 石油化学系事業

高品質な製品群をグローバルに提供

1960年代～ 1990年代～ 2010年代～

### 基盤事業





メディカル材料事業での展開

# 医療の現場に変革をもたらすマテリアルの力

世界的な成長分野であり、JSRグループの戦略事業の中でも注目度の高いライフサイエンス分野。マテリアルでどのような課題を解決し、どんな未来を描こうとしているのかをご紹介します。

## 病院で

医療行為で使われる器具や用具は、安全性と高い品質が何より重要です。JSRグループは、さまざまな医療に使われる材料を長年提供し続けています。

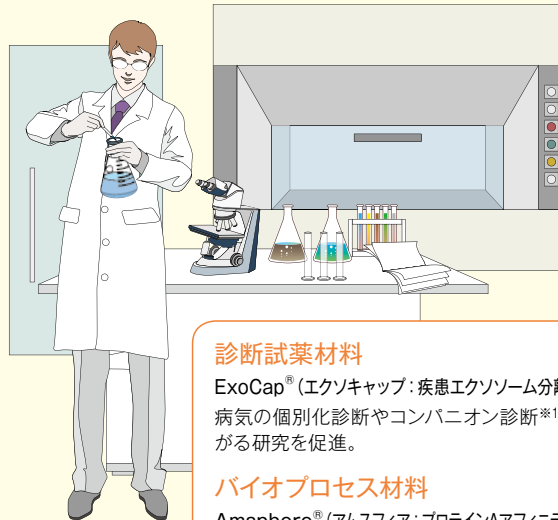


### メディカルポリマー

輸液バッグ、輸液チューブ、医療用手袋  
医療用製品向けに厳重に品質管理して提供してきた、高機能樹脂、機能性エラストマー、熱可塑性エラストマーをラインアップ。

## 創薬の現場で

先進国では、一人ひとりに最適な治療法を探る個別化診断に注目が集まっています。一方、新興国では人口増に伴い、高品質で安価な医薬品に対するニーズが増えつつあります。JSRグループの技術は、こうした課題の解決にも活用され始めています。



### 診断試薬材料

ExoCap® (エクソキャップ：疾患エクソソーム分離試薬)  
病気の個別化診断やコンパニオン診断※1につながる研究を促進。

### バイオプロセス材料

Amsphere® (アムスフィア：プロテインAアフィニティ担体)  
抗体医薬品の製造プロセスに用い効率化することにより、抗体医薬品の普及を促進。

※1 コンパニオン診断 薬に対する効果や副作用など、薬に対する感受性の個人差を治療開始前に検査し、一人ひとりに効果の高い治療に結び付ける診断のこと

## 優れた技術と品質で、創薬に新しい価値を提供する

ヒトの体の中には宇宙空間に漂う星のように、無数の体内物質が存在します。私たちの技術が未知の物質の検出や物質の機能の解明、さらには新しい薬剤の開発に貢献することに大きなやりがいを感じます。

JSR が以前から取り組んでいた診断試薬事業とメディカルポリマー事業に、事業化段階にあったバイオプロセス事業を集約して、2012年にJSR ライフサイエンス社がスタートしました。

ライフサイエンス分野で社会から期待されるニーズに応え、より迅速な製品開発を進め、メディカル材料事業に特化したサービスや品質保証体制の強化を図るためには、分社化するのが良いと考えました。今後、社会が個別化医療に向かう中、病気の症状を示すバイオマーカーや遺伝子変異などの検出に役立つ高品質の材料や試薬を通じて、JSR グループの力を活かせる分野はますます拡大すると考えています。



北嶋 幸子

JSRライフサイエンス株式会社  
執行役員 診断試薬材料部長

## ライフサイエンス分野のグローバル展開

創業支援の分野で新しい技術やニーズにスピーディに対応するために、JSRグループの持つ技術を磨くだけでなく、世界各地で戦略的投資や提携も積極的に行っています。



オーストリア  
BIA Separations社に  
戦略的投資 (2011年11月)

スイス  
ChromaCon社に  
戦略的投資 (2013年2月)



中国  
合併会社 捷和泰(北京)生物科技有限公司の工場竣工 (2012年4月)

日本  
株式会社医学生物学  
研究所との提携  
(2013年3月)

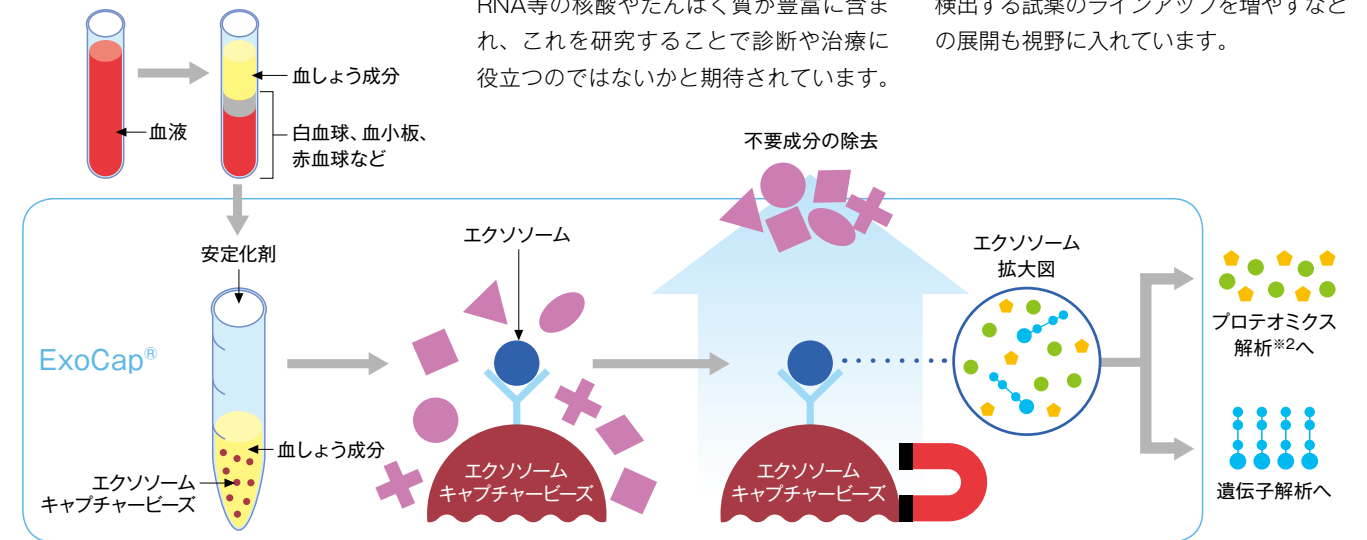


米国  
JSR Micro, Inc.において  
ラボの拡張に着手  
(2013年4月)



## 個別化医療の研究に 役立つ診断試薬材料

### ExoCap®を用いた エクソソームの分離例



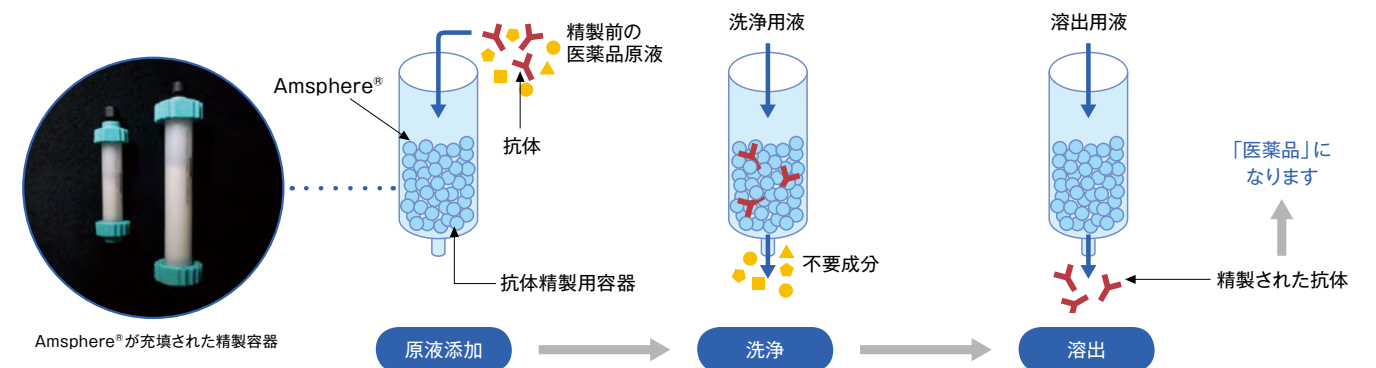
※2 プロテオミクス解析 生体内に存在するたんぱく質がどのような役割を果たしているのかを、構造や機能を詳しく調べることによって明らかにしていくこと

## 薬づくりを革新する バイオプロセス材料

抗体医薬は病原体に直接作用することから、薬効性が高く副作用が少ないとされており、がんやリウマチの治療薬に使われ始めています。この抗体医薬の製造プロセスの中で、JSRの高分子技術を応用した

Amsphere®を用いることにより、主成分である抗体をより早く、より高純度に精製できるようになりました。今後も抗体医薬を用いた先端医療の発展・普及に貢献していきます。

### Amsphere®による抗体の精製



## 捷和泰(北京)生物科技有限公司 ～成長市場・中国での医療支援ビジネス～

中国では、国家が農村部への医療普及に力を入れ始めましたが、医療費や保険制度、地理的な問題などから、なかなか病院に行けない、行かない人も多いという現状があります。当社が診断薬中間材料を提供することで、病気の早期発見やより良い医療の提供、医療コストの抑制に貢献していきたいと考えています。市場としては、ラテックス診断薬と化学発光診断

薬の拡大を見込んでいます。JSR が日本で培った高い技術力や製品品質に対する期待が大きい一方、取引先の技術レベルや、高い専門性を持った現地営業人材の育成など課題も多くあります。当社は設立して1年強ですが、中国の医薬分野で存在感を示せるよう、研鑽を続けていきます。



安田 健二

捷和泰(北京)生物科技有限公司  
総経理



# JSRグループのCSRを革新し続けるために必要なこと

地球規模の課題がますます増大している時代の中で、JSRグループが社会的責任を果たしながら事業を推進していくために、どのような意識や行動が必要なのか。今回は社外から3名の有識者をお招きしてダイアログを行い、意見交換を通じて今後のCSRの課題を探りました。

開催日：2013年6月13日(木) 会場：JSR六本木倶楽部

## 事業の根幹に影響を及ぼす気候変動や資源調達の課題を認識する

**藺田氏** まず、2050年くらいまでを視野に入れ、長期的な視点から地球規模の課題、社会問題と、JSRグループの事業の関連について整理していきたいと思います。

**安井氏** 地球規模の課題のひとつは、厳しくなりつつある気候変動です。アメリカのハリケーンなどを見ると、海岸にコンビナートをお持ちの化学メーカーにとって大きなリスクだと感じます。気候変動の限界はどこなのか、気候変動を抑えるために人間が自分たちの欲望を抑えられるかという視点が、重要になると感じています。

もうひとつの課題は、資源問題でしょう。石油や石炭などは燃料として使うものだという認識がありますが、燃やしてしまうのはもったいない。これらの資源は「原料系」として意識すべきだと思います。そうならないと、長期的に平衡状態を保てるような社会にはならないのではないのでしょうか。

**清水** 例えば2030年までの長期スパンで捉えると、現実の対応を考える際には、リードタイムを踏まえていつから準備すべきかが重要なポイントになります。例えば、JSRグループの工場でも石炭ボイラーを電気・蒸気の供給の一部に充て

「常に先を見ながら、やるべきことをフレキシブルにやる会社として、広く世の中の牽引役となることを期待します」



**足立直樹氏**

株式会社レスポンスアビリティ 代表取締役。東京大学理学部、同大学院で生態学を学び、理学博士号を取得。国立環境研究所、マレーシア森林研究所（FRIM）勤務の後、コンサルタントとして独立。企業と生物多様性イニシアティブ（JBIB）事務局長、日本生態学会 常任委員、環境省 生物多様性企業活動ガイドライン検討会委員、経済社会における生物多様性の保全等の促進に関する検討会委員等を歴任。

## 安井 至氏

国連大学 元副学長。東京大学 名誉教授（生産技術研究所教授、元東京大学国際・産学協同センターセンター長）。2009年4月より独立行政法人 製品評価技術基盤機構に在籍。専門は無機材料化学、環境科学、産学共同研究。現在、環境省 中央環境審議会委員、内閣府 総合科学技術会議専門委員などを務める。『「化学」で何がわかるか』（化学工業日報社）、『地球の破綻 21世紀版成長の限界』（日本規格協会）など著書多数。



「地球を消費しながら事業を行う中で、最善のことをやれると言い切れる企業に、ぜひなっていたきたいです」

ています。石炭は埋蔵量や供給安定性を考えると優れた燃料ですが、CO<sub>2</sub>排出量とのバランスもあります。また、お話があった通り原料としても貴重な資源です。仮に別の燃料にスイッチしていくとすると、その準備を10年単位で考えることが必要でしょう。エネルギー政策上、再生可能エネルギーの導入は必要だと考えますが、一方現状の太陽光発電や風力発電の不安定性を考えれば、多くを期待することは難しいでしょう。いずれにせよ、電力については企業一社で解決できる問題ではなく、国単位、国際的枠組での長期的視野に立った対応に期待しています。

**足立氏** 燃料として生物由来のものも期待されていますが、生物由来のものは生産量に上限があるので、量を安定的に確保することは困難かもしれません。これもむしろ原料と考えたいですね。

**川崎** 原料という観点では、合成ゴムの主要原料であるブタジエンの調達にも変化が起こっています。これまで、エチレンをつくるときの副生物からブタジエンを抽出してきました。しかし、中東ではエタンガスをベースに、アメリカなどではシェールガスをベースにした低コストのエチレンが競争力を持ちつつあり、日本のエチレンの生産量が低下してきています。それに伴ってブタジエンの原料となる副生物も減りつつあります。我々としては、従来の副生物に頼らないブタジエ



ンの確保手段を検討する必要が出てきており、技術確立を目指しています。石油精製時の副生ガスを利用したり、バイオマスを原料とすることも検討しています。

**安井氏** バイオ系の原料を検討する際には、注意が必要です。パーム油を生産するアブラヤシの栽培で熱帯林が伐採されたように、生物多様性の観点でバッティングするケースが多いからです。

## 化学業界特有の長いバリューチェーンの中で存在感を発揮する

**藺田氏** 足立さんは、化学メーカーが直面する課題について、どのようにお考えでしょうか？

**足立氏** 化学産業というのは、ものすごく長いバリューチェーンの中に位置づけられています。原料を供給する上流側、製造した素材を使う下流側のどちらに変化があっても、チェーンの中にいる化学メーカーは対応しなければならない。非常に複雑なパズルのような関係性です。バリューチェーン全体での環境やCSRへの配慮を考える場合、化学メーカー社だけでどうにもできないこともあります。ですから、サプライヤーに対して指導したり、顧客に対して提案したりという責任を果たす必要も出てきます。

**川崎** 我々の工場が立地するコンビナートの中でも、上流・下流の考え方があります。また、コンビナートは地域の一部ですし、同業他社の工場も立地していたりする。環境や社会への配慮は、まず自分たちの工場できちんとやって、周辺や行政も巻き込んで調和することも目指す必要があると感じています。

**久保** 実際、メインプラントが立地する四日市市では他社と

## 藺田綾子氏

（ファシリテーター）

株式会社クレアン 代表取締役。甲南大学文学部社会学科卒業。広告代理店、株式会社リクルート映像を経て、1988年に株式会社クレアンを設立。延べ約450社のCSRコンサルティングやCSR報告書の企画制作を提供。NPO法人 サステナビリティ日本フォーラム事務局長、NPO法人 社会的責任投資フォーラム理事、社会イノベーター公志園300人委員会 実行委員などを務める。



共同で行政へも働きかけをしています。かつて四日市市では公害問題がありましたが、自然と共生する都市を目指して、近隣の他企業も含めて、どのように連携して進めていくか協議を始めたところ。

**平野** サプライヤーとの関係という部分では、JSRは一次サプライヤー、二次サプライヤーをさかのぼって状況を把握することが当たり前のように調達部門の中に入っている。これは、2000年頃にアメリカの半導体メーカーと取引を始めの際の監査で指摘されたことがきっかけでした。それまで取引の際に二次サプライヤーまでの把握は限られたものを除きやっていなかったため、カルチャーショックでしたが、その経験は現在に活かしています。

**足立氏** 生物多様性については、JSRは「企業と生物多様性イニシアティブ（JBIB）」に4年前から参加いただいていますが、こんなに早い段階から興味を持ち、しかも実際に行動してくださった化学メーカー、素材メーカーは他にありませ



んでした。自分たちが何を求められているかを自覚し、それに合わせてどんどん変わろうとしている。一緒に活動をする中で、常に先を見ながら自分たちでやるべきことをフレキシブルにやっている会社なんだという印象を強く感じます。先に話のあった行政への働きかけなどもそうですが、ぜひ今後も活動を広げていただきたいと思います。そして、そうした活動を対外的に発信することで、広く世の中の牽引役となっていただくことに期待しています。

### 社内外のステークホルダーと共に 真のイノベーションの実現を目指す

**藺田氏** JSRグループは企業理念の中に「Materials Innovation」を掲げていらっしゃる。イノベーションには、ネガティブなインパクトをポジティブに変えたり、ポジティブなインパクトをさらにポジティブにする、今までにない発想が重要です。この原動力として従業員の育成が不可欠になると考えますが、社内ではどのように捉えていらっしゃるのでしょうか？

**清水** 私は「Materials Innovation」には「マテリアル自身のイノベーション」と「その新しいマテリアルを通じた世の中のイノベーション」というふたつの側面があると考えています。社会がどうなるべきなのかという視点を、研究者もマーケティング担当も、従業員みんなが持つことが大事だと思います。独りよがりなものづくりではなく、また直接の対面顧客のニーズだけではなく、世の中を見渡し、新しいトレンドを把握する感性が従業員に求められているのかと思います。

**安井氏** 特に日本では、イノベーションという言葉が「消費者のニーズを超えちょっと良いものをつくる」というような考え方になっていないでしょうか。イノベーションの方向性とはそういうものではなくて、「やわらかなバックキャストिंग」が必要というのが私の考えです。社会の現状を認識し、現状がどういう方向に動いていくのかを予測して、将来社会の姿を描く。そこから「世の中の人々が本当に欲しがっているもの」のニーズをブレイクダウンしていくという作業ですね。日本だけのドメスティックな視点に捕われず、世界全体でこのくらいの人々がこういう方向に考えているから、こんなものが必要だと分析をすることが必要です。つまり、な

るべく広範な、鳥瞰的視点が大事になります。

**平野** 少し乱暴な言い方ですが、日本は妙に豊かであるが故に、危険だという気がします。人口問題や環境問題をはじめ、世界にはさまざまな課題があるのに、日本にいと快適で気づけなくなってしまう。ですから、私が担当している経理・財務部門では、部署でローテーションがあったときには、海外勤務を経験させることにしているんです。それは人材育成ポリシーなどと呼べるものではありませんが、とにかく海外に行かせます。

**久保** こうした取り組みは、「日本はものすごく便利で何も考えなくても生活していくことができる」という特異性を若いうちから実感することができるので、重要だと思います。

**藺田氏** お話いただいたような企業姿勢が見えてくると、JSRグループに対する投資家の評価も変わりそうですね。

**足立氏** 日本ではまだ、社会的責任投資（SRI）が特殊な投資スタイルだと思われているようですが、欧州などでは当たり前にESG（環境・社会・ガバナンス）のリスクがないかどうかを投資判断に入れています。いくら目の前の業績が良くても、ESGのリスクを抱えていると長期的な投資には向かない。ESGに関してきちんと取り組んでいるというのを最初のスクリーニングの基準として使い、それからパフォーマンスや業績を見るということです。

**清水** 私は、ESGだけをことさらに強調することには違和感があります。まずは本業にきちんと取り組み、その中に自然とESGの概念が入ってきているのが望ましいと考えています。制度設計や組織設計、従業員教育に、当たり前のようにESGの観点が反映されているというのが理想的ではないかと思っています。

### 長期的な視座から事業のあり方を見つめ 日常業務の推進力に変えていく

**藺田氏** それでは最後に、本日のまとめを、お一方ずつお願いいたします。

**足立氏** 先ほど話に出ていた通り、日本でイノベーションと呼ばれるものは「本当にそれがイノベーションなの？」と思うくらい小さなもの、改良程度のものを指していることが

あります。しかし本当のイノベーションとは、もっとドラスティックで物事の根幹を揺さぶるようなものではないでしょうか。そして、その根幹を支えているのが素材産業だと私は思います。消費者の方があっと驚くような機能や製品も、実現するためには素材の技術が必要です。つまり、本当のイノベーションは素材から生まれると思うので、その点でJSRグループにとっても期待をしています。また、新しいものを生み出す意味でも、多くの従業員を海外勤務させる取り組みも素晴らしいと思います。従業員が、世界のいろいろな場所のローカルな日常生活を知っていることは、今後、世界中の生活を変えるようなイノベーションを生み出すための原動力になるはずです。

**安井氏** 今のままでは日本の将来は厳しい、と私は思っています。いちばんの原因はマインドです。日本人ローカルの狭い場所に寄り合って生きていくことが心地良いと思ってしまっているのではないか。それは企業も同様で、自社が正しいことをやっていると主張し、自社を誇る企業というのは日本ではあまりないと思います。それを主張するためには、全地球的な視点と、長い時間軸で物事を捉えなければならない。そしてそれによって将来をリードしていくんだという気概を持った経営者が、今の日本にいちばん求められていると感じます。JSRIは、経営者である小柴社長の哲学が明確で、リーダーシップを発揮されている。その個性に期待しています。私たちが地球上で生活し、事業を行う以上、地球を消費しながら生きているわけで、その中で最善のことをやれると言い切れる企業に、ぜひなっていたらと思います。

**清水** 気候変動や生物多様性など、これまでも取り組んできた問題もあれば、シェールガス革命のように新たな対応を考えるべき変化も起きています。これら多様な論点を取り込みながら、より長期的な視点でビジネスを考えなければならないことを再認識しています。また、いろいろな考え方を組織に落とし込む際には、従業員一人ひとりの感度を上げることが重要である一方、従業員が入れ替わっても組織としての感度を保っていく必要性も、課題として認識しなければと強く感じました。

**川崎** 普段、日常的に事業や業務に埋没してしまい、目先の



収益や今年の目標の達成にばかり目が行きがちです。世の中の環境が毎日変わっていく中で、長期的にどう見ていくのかということについて、示唆に富んだお話を伺うことができたと思います。本日の内容を我々の仕事に反映させていくのはもちろんですが、従業員にも理解してもらうことで、意識やモチベーションの向上につながるのではと感じています。普段と違った視点からの気づきを大切にしていきたいと思います。

**平野** 私は比較的楽観的に考えています。気候変動やエネルギー問題、原料調達など、課題はたくさんあります。しかし人類は今までも困難な課題を解決してきた生き物です。JSRグループの中にもさまざまな課題解決のDNAがたくさん蓄積されているし、良いリーダーもいる。今後課題になるのは、活動を加速させていかなければならないということ。まずは自分から行動するということが大切だと、改めて感じました。

**久保** こういった形でダイアログを実施するのは、JSRグループのCSRとしては初めての試みでした。CSRを進めるうえで、社会と対話し、それを施策に活用していくことが重要と認識しています。今回のダイアログは、単なる一般論に終わらず、大変広い視野で語り合うことができ、大きな示唆を得ることができたと感じています。また、私たちに大きな期待を寄せていただいていることも実感できました。一度にすべてに取り組むのは難しいですが、順を追って進め、JSRグループがより良い企業体になることを目指していきたいという想いを新たにしました。ありがとうございました。

### 当日のファシリテーター藺田氏からのメッセージ

JSRグループの取り組みは、日本企業の中では一歩進んだものです。今後、社会に向けてもっと発信することで対外的な評価が高まり、ブーメラン効果で社内浸透にもつながると思います。ぜひ、グローバル企業としてのベスト・プラクティスとなることに期待しています。

CSRレポート（Web版）では、本ダイアログの全文を掲載しています。  
[web](#) CSRレポート2013>特集2



**川崎弘一**  
常務執行役員  
環境安全担当



**平野勇人**  
取締役執行役員  
CSR担当



**清水喬雄**  
執行役員  
経営企画担当



**久保達哉**  
CSR部長





# JSRグループの企業理念体系とCSR

人や組織形態が変わっても「持続的な成長」を成し遂げる企業風土をJSRグループ内に醸成していくことを目的に、当社グループの社員全員が、責任と自信を持って行動するために共有すべき「価値観」として、企業理念体系を制定し、浸透活動に注力しています。企業理念体系は「企業理念」「経営方針」「行動指針」から成っています。

## 企業理念 Materials Innovation

マテリアルを通じて価値を創造し、人間社会(人・社会・環境)に貢献します。

JSRは、マテリアルを通じて新しい価値を創造、すなわちイノベーションを実践します。マテリアルは素材のみにとどまらず、素材の強みを活かした部材をも含みます。価値の創造は、研究開発活動にとどまらず、製造・販売・購買・物流・企画管理など、JSRグループ全体のすべての企業活動を通じて実現されます。人間社会への貢献は、人・社会・環境にとってかけがえのないマテリアルを通じた価値創造の結果もたらされます。“Materials Innovation”はこの内容が込められたJSRの存在意義を示すものです。

## 経営方針 変わらぬ経営の軸

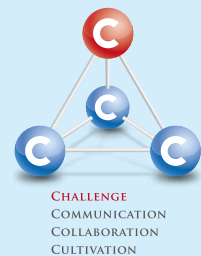
|           |  |
|-----------|--|
| 絶え間ない事業創造 | 絶え間ない大きな社会ニーズの変化に対し、必要なマテリアルも変わり続けます。JSRは今ある事業に留まることはなく、常に新たな事業を創造することで、社会ニーズの実現に貢献し、持続的な成長を達成します。 |
| 企業風土の進化   | 変わり続ける社会ニーズへマテリアルを通じて応え続けるために、人材・組織は常に進化し続けます。自身の良き風土は維持しながらも新しいものを取り入れ、進化するエネルギーに富んだ経営と組織を築き続けます。 |
| 企業価値の増大   | マテリアルを通じて事業機会を創出し、企業価値の増大を目指します。そのためには、顧客満足度の向上と社員の豊かさの向上を重視し続けます。                                 |

## 経営方針 ステークホルダーへの責任

|   |   |
|---|---|
| 顧客・取引先への責任<br>JSRグループの全顧客・取引先に対する責任です。          | ○移り変わる時代の多様な材料ニーズに応えるため、変化への挑戦と進化を絶やしません。<br>○顧客満足のための持続的な向上を目指します。<br>○全ての取引先に誠意をもって接し、常に公正・公平な取引関係を維持し続けます。<br>○サプライチェーンにおける環境・社会に配慮し続けます。  |
| 従業員への責任<br>JSRグループ全社員に対する責任です。                  | ○社員一人ひとりには公平な基準に基づき評価されます。<br>○社員には常に挑戦する場を提供し続けます。<br>○社員にはお互いの人格と多様性を認めあい、共に活躍する場を提供し続けます。  |
| 社会への責任<br>我々が生活し、働いている地域社会、更には全世界の人間社会に対する責任です。 | ○地域社会の責任ある一員として環境・安全に配慮した事業活動(レスポンスブル・ケア)を行います。<br>○地球環境負荷低減を含めた地球環境保全のニーズに対し、環境配慮型製品を提供し続けます。<br>○製品ライフサイクル全体から発生する環境負荷の削減に努めるとともに、環境安全配慮を行います。<br>○事業活動を通して、生物多様性の保全に積極的に貢献し続けます。 |
| 株主への責任<br>株主全体に対する責任です。                         | ○マテリアルを通じて事業機会を創出し、企業価値の増大を目指します。<br>○経営効率の向上を常に行います。<br>○透明性が高く健全な企業経営を行うことにより、株主に信頼される企業となります。  |

## 行動指針 4つの“C”

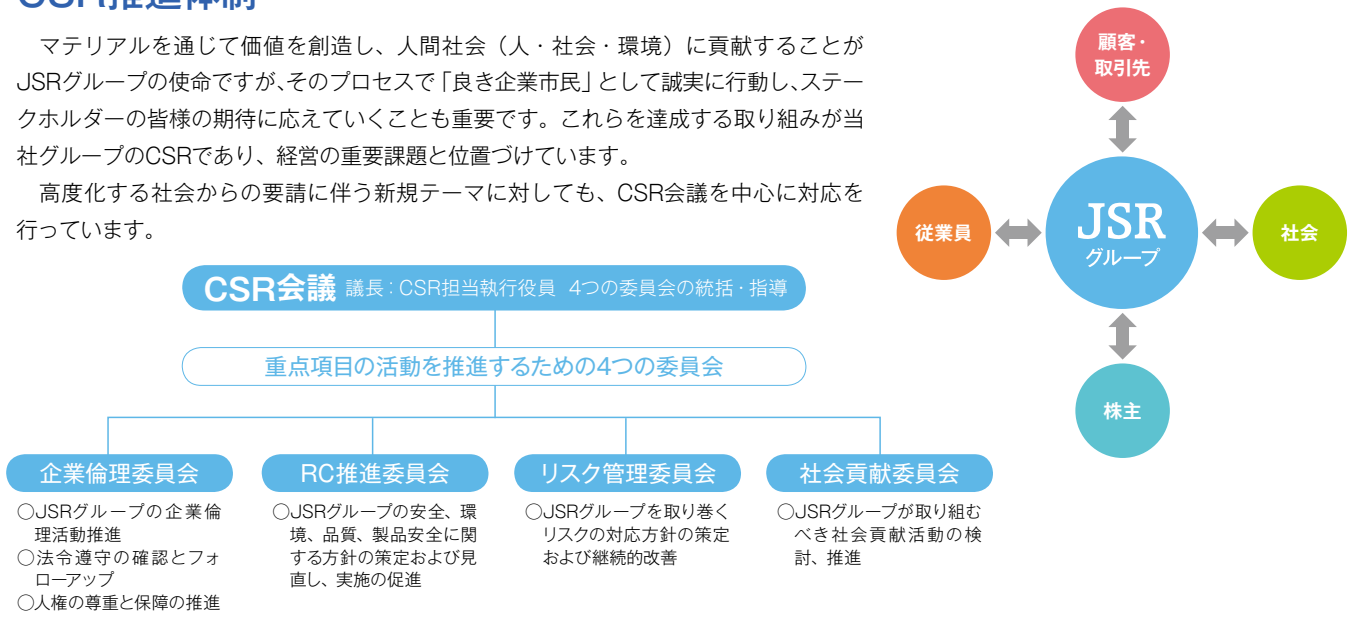
|                    |  |
|--------------------|--|
| CHALLENGE (挑戦)     | JSRグループ社員一人ひとりには <b>グローバルな視点で</b> 、常に挑戦意欲を持ち続け <b>自発的に新しいことに着手し、例え失敗してもその経験を活かして次の成果につなげます。</b>                |
| COMMUNICATION (対話) | JSRグループ社員一人ひとりには <b>共通の基本的価値観に基づき</b> 、グループ・会社の方針、部門の課題を透明性をもって共有し、同じ目標に向かって <b>双方向の対話を重視しながら</b> 課題解決に取り組みます。 |
| COLLABORATION (協働) | JSRグループ社員一人ひとは、 <b>社内の組織の壁にとらわれない仕事の進め方</b> を常に心がけ協力しあい、また、従来の発想にとらわれず積極的に <b>社外との協働</b> を取り入れて業務を進めます。        |
| CULTIVATION (共有)   | JSRグループ社員は、 <b>上下双方向の対話</b> を重視した人材育成を通じ、 <b>上司と部下が共に成長していきます。</b>   |



## CSR推進体制

マテリアルを通じて価値を創造し、人間社会(人・社会・環境)に貢献することがJSRグループの使命ですが、そのプロセスで「良き企業市民」として誠実に行動し、ステークホルダーの皆様の期待に応えていくことも重要です。これらを達成する取り組みが当社グループのCSRであり、経営の重要課題と位置づけています。

高度化する社会からの要請に伴う新規テーマに対しても、CSR会議を中心に対応を行っています。



## 2012年度に実施した主な取り組み

### 企業理念浸透活動

- ・社長を含めた役員対話会 (29回で422名が参加)
- ・浸透度調査 (前年度の活動結果を定量的に把握)
- ・各職場にて前年度の浸透度調査結果を共有し、課題をフィードバック
- ・リクルーター・面接担当者教育 (141名受講)
- ・階層別研修での理念教育 (168名受講)
- ・浸透プロジェクトメンバーが各職場で説明とディスカッションを実施
- ・目標管理カード運用方法の改善 (業務目標に加え4C目標を新設)
- ・グループ各社での浸透活動担当者の任命
- ・グループ各社の活動担当者を中心としたディスカッション (集合型ワークショップと社長対話会)



社長との対話会

### 役員対話会に参加した社員の感想

- ・噛み砕いた内容説明で、堅苦しいイメージが払拭された。なぜ必要か、なぜ重要か、込められた想いが伝わった。
- ・自分の仕事と理念とのつながりに気づき、改めて誇りと責任を持つようになった。

### コンプライアンスの強化

- ・守るべき法令についてのポイントをまとめた「コンプライアンスハンドブック」を作成し、国内全従業員に配布しました。
- ・国内、海外の拠点で企業倫理意識調査を実施し、企業倫理意識の現状把握および課題を抽出、課題についてはフォローアップ計画を策定し、対応を進めています。



コンプライアンスハンドブック

### ISO26000を参考とした分析

JSRグループのCSRの取り組みについて、現状把握と今後の課題抽出のために、ISO26000をベースに分析を実施しました。結果は今後の活動に活かす予定です。

CSRレポート(Web版)に、詳細情報を掲載しています。  
[web](#) CSRレポート2013>CSRマネジメント

## 国連グローバル・コンパクトへの参加

JSRグループは、2009年4月、国連が提唱する「グローバル・コンパクト」に参加しました。企業の社会的責任が強く求められる中、グローバルに事業活動する企業として、グローバル・コンパクト10原則が謳う人権・労働・環境・腐敗防止へのより一層の配慮が必要と認識しています。私たちはグローバル・コンパクトへの参加を国際社会の中で責任ある行動を実践するための「宣言」と位置づけ、より積極的に「企業の社会的責任」を果たしていきます。

### グローバル・コンパクトの10原則

- ① 人権擁護の支持と尊重
- ② 人権侵害への非加担
- ③ 組合結成と団体交渉権の実効化
- ④ 強制労働の排除
- ⑤ 児童労働の実効的な排除
- ⑥ 雇用と職業の差別撤廃
- ⑦ 環境問題の予防的アプローチ
- ⑧ 環境に対する責任のイニシアティブ
- ⑨ 環境にやさしい技術の開発と普及
- ⑩ 強要・賄賂等の腐敗防止の取組み





# グローバル各社の取り組み

JSRグループでは、企業理念体系や中期経営計画をグローバルで共有しつつ、国・地域ごとに異なる課題やニーズに応じた取り組みを進めています。

自社の事業環境と求められている社会的責任について、海外グループ各社のリーダーの声を集めました。

## JSR BST Elastomer Co., Ltd.



取締役社長  
**長友 崇敏**

工場を建設中のタイのラヨン県マブタブット地区は化学工業の集積地で、環境に対する意識が高い地域です。2012年5月に近隣で発生した爆発事故により安全性への要求も厳しくなっているため、安全に関する万全の施策を実施し、地域社会へ訴求していくことが必要です。工場の建設にあたって地域住民への説明会を行ったほか、地域行事への参加や周辺学校への寄付などの地域貢献活動を行っています。

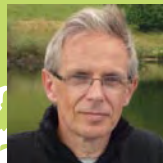
## Elastomix (Thailand) Co., Ltd.



代表取締役(当時)  
**後藤 眞**

タイでは経済成長と環境整備（工業地域の環境問題、インフラ整備など）が注目されているとともに、生活の質の向上が求められています。CSRに関する認知度はまだあまり高くありませんが、既に近隣住民との対話や省エネ、リサイクル率の向上などの環境対策への取り組みを進めています。今後はさらに、従業員のモチベーション向上と、定期的な教育による企業倫理の徹底に注力していく予定です。

## JSR Micro N.V.



President  
**Bruno Roland**

EUでは、環境と顧客・従業員の安全を守ることに大きな関心が寄せられています。化学薬品の環境への影響や従業員の健康、安全性の技術への注目は高く、当社では環境への影響や労働安全に最大限に配慮し、従業員との積極的な対話を通じ、開かれたコミュニケーションを促進しています。EUの規制は複雑ですが、環境や労働安全への影響を測りながら、適切な対応を行っています。

## JSR Micro, Inc.



HR Director  
**Phyllis Moracco**

カリフォルニアでは、最近始まったキャップアンドトレード方式と、インテル社によるグリーンケミストリー・ベンチマーキングが話題となっています。当社はサプライチェーンでのCSRに関する取り組みの共有も進めています。サプライチェーン各社や投資家など社外ステークホルダーへの働きかけは顧客の要望でもあります。今後は、生物多様性プロジェクトにもかかわっていききたいと考えています。

## JSR Micro Korea Co., Ltd.



代表理事社長  
**川橋 信夫**

韓国では、企業が高いレベルの社会的役割を果たすことが期待されています。安全衛生、品質管理への関心も高まる中、当社はGHS※1対応、MSDS※2作成、使用薬品の安全性の確認、法令に対応した新規化学物質の登録など、さらなる遵法の徹底に取り組んでいます。今後、韓国外への製品輸出が増加する中で、輸出対象各国の化学物質管理制度や貿易関連規則を整理して法令遵守の体制整備を進めていきます。

## JSR Micro Taiwan Co., Ltd.



董事長  
**根本 宏明**

台湾では、99%以上のエネルギー源を輸入に頼っているため、省エネ・低炭素化は喫緊の課題であり、当社でも工場中心に省エネ対策を積極的に行っています。また、工場の緑地では台湾固有種を栽培するなど生態系との調和も図っており、2012年から2年連続で地元工業区の緑化コンテストにて表彰されました。今後もJSRグループ全体のCSR活動の目標をもとに、地域性にも配慮した活動を推進していきます。

## Techno Polymer America, Inc.



President  
**石井 敦**

米国では、サステナビリティへの取り組みが一流企業の条件になっていると感じます。特に環境問題は、プラスチックの世界的な展示会「NPE2012」でも大きなテーマでした。また、企業倫理についても非常に厳しい国柄なので、営業活動などでは十分に注意しています。今後は、JSRグループならではの技術力を武器に、今にも増して欧米企業のニーズに合った環境対応型材料を開発していきます。

## JSR Trading, Inc.



社長  
**筒井 健**

ガソリン価格高騰から、アメリカでも低燃費なコンパクトカーへの乗り換えが進んでいます。当社は低燃費タイヤの原料となるJSR S-SBRの販売拡大を通じて、環境改善に寄与しています。また、貿易管理・規制への対応や労働問題などのリスク管理に力を入れており、定期的に状況確認を行っています。現地に根差した企業を目指し、ローカル企業との取引拡大やナショナルスタッフの雇用を進めています。

## Techno Polymer Hong Kong Co., Ltd. Techno Polymer Guangzhou Co., Ltd.



Managing Director  
董事長・総経理  
**岩下 直正**

当地は今、経済発展・国家発展を最優先する時代から、企業が社会的責任を果たすために何をすべきか議論できるステージへ変化しています。当社は運営規模の小さい会社ですが、現地法人として持続可能なCSR活動とは何かを従業員と勉強会などを行いながら一緒に考えているところです。まずは、段ボールや新聞のリサイクルなど身近な活動から取り組みを始めました。

## Techno Polymer (Shanghai) Co., Ltd.



董事長・総経理  
**平田 大**

中国は環境面で世界から厳しい見方をされています。そのため、有害化学物質の輸入管理レベルは年々厳格化されていますし、個人レベルでも環境や安全に対するマインドが高まっています。環境規制や労働環境改善のニーズに応えるため、顧客の工程削減につながる材料などの販売拡大を目指すとともに、法令遵守、公正な取引の実践、雇用を維持し、人材育成に取り組んでいます。

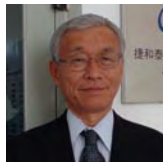
## JSR (Shanghai) Co., Ltd.



董事長  
**藤本 敏行**

中国でも、一般の人々の環境意識は年々高くなってきており、「化学品を扱う企業として、中国の法規制に適切に対応しつつビジネスの拡大を目指す」ことが、当然ですが、基本であり重要であると考えています。事業の拡大に連れナショナルスタッフの育成も重要となってきており、JSRグループの一員としてチャレンジする気概を持ってもらえるようなマネジメントを意識してやっていきたいと思っています。

## 捷和泰(北京)生物科技有限公司



総経理  
**安田 健二**

中国ではこの冬騒がれたPM2.5のみならず、より良い環境、医療への国民の意識が日に日に増していると実感しています。私たちの製品である診断薬中間体は、より良い医療環境を提供するための製品であり、まさしく事業活動そのものがCSRであると言えます。また当社が中国企業との合併企業である利点を活かし、社員、家族との社員旅行などを企画し、地域コミュニティへの積極的な参画を図っています。

## Techno Polymer (Thailand) Co., Ltd.



Managing Director  
**上原 章太郎**

タイは、急激な経済成長の裏で環境・社会問題が未解決のままとなっており、企業の対応が期待されています。デモや洪水などのリスクもあるため、リスクマネジメントの向上にも力を入れています。今後は従業員自らがCSRのために何をすべきか意識できるよう教育する取り組みを進め、CSR活動に積極的に参加でき、誇りを持てる企業として成長することを目指します。

## 上海虹彩塑料有限公司



董事総経理  
**大村 勝郎**

上海でも、中国の他の地域と同様に、経済発展と環境保護の両立が社会的な課題となっています。特にPM2.5をはじめとする環境問題と、それに対する改善対策についての関心は、非常に高くなっていると感じています。私たちも、生産活動における省資源、省エネルギー活動の推進を積極的に進めていきます。

## 日密科偲橡膠(佛山)有限公司



総経理  
**加藤 雅司**

環境・安全に関する法規が整備され、企業への安全管理指導も強くなってきています。当社では以前から環境・安全の維持と向上に取り組んできましたが、これからも継続して推進していきます。また、従業員に対する責任を強く求められるようになっているので、福利厚生制度の整備や従業員の意識調査などを行い、人材の確保・育成に努めています。

## 上海立馳高化工有限公司



総経理  
**小柳 景也**

大都市を中心に環境意識が急激に高まっています。PM2.5や食品管理法の強化などの話題が絶えず、当社でも環境意識に起因する商材の組み合わせを強化しながら、中国の貿易実務にわたる諸規制を遵守することに力を入れています。今後は、JSRグループの環境対応や地域社会への貢献をさらにアピールできるよう、自分たちの拠点から柔軟に情報を発信していけるよう努めます。



# ステークホルダーへの責任

JSRグループは、経営方針に定めるステークホルダーに向けた、責任を果たすためのさまざまな活動に取り組んでいます。以下に、主な取り組みについてご紹介します。

## 顧客・取引先

### インテル コーポレーションの「サプライヤー・コンテニューアス・クオリティー・インプループメント(SCQI)賞」を連続受賞

世界的な半導体メーカーであるインテル コーポレーション（米国カリフォルニア州）から供給企業に贈られるもっとも栄誉ある賞、SCQI賞を受賞しました。3年連続4度目の受賞となります。これは、

当社から提供している先端リソグラフィ材料およびCMP材料が卓越した品質と成績を達成し、また当社のCSRの取り組みが高く評価されたものです。

### BCM体制の強化

2011年に発生した東日本大震災での経験を踏まえ、BCM（事業継続マネジメント）というコンセプトを前面に打ち出した体制の構築に取り組んでいます。2012年度には四日市工場の生産が一定期間停止する場合を想定したBCM体制を

構築しました。大規模災害発生時の初動からBCM発動までの流れを疑似体験し、的確な対応をするための「事業継続初動訓練」も行いました。

今後は、順次、他の事業所、グループ企業への水平展開を進め、グループ全体でBCMの強化を図っていきます。



SCQI賞授賞式（写真撮影：Dan Agulian）

### 品質パフォーマンス監査

製造業である当社グループには、顧客の品質要求、コスト要求、そして供給を満たす責任があります。この責任を果たすため、2012年度より従来の品質監査に加え、品質パフォーマンス監査を新設しました。QC手法にシックスシグマ手法も加えて品質改善活動の両輪として奨励し、より優れた品質を目指すべく、2013年2月、当社3工場において初年度の監査を社長をトップとして実施しました。

## 従業員

### 異文化コミュニケーションワークショップを開催

JSRグループでは外国籍社員の採用が進んでおり、現在JSRグループ全社員の約2割が日本国籍以外の社員です。ワークショップでは「ダイバーシティ&インクルージョン（受容）」の行動を体感し、ケーススタディ、ロールプレイ、ディスカッションを通じて価値観の違いを学びました。これまでに中国、米国、インド、韓国の事例を取り上げました。



ワークショップの様子

#### ワークショップファシリテーター 鈴木裕美子さん （株式会社ジャパン・ブレックス）

「インクルージョン」とは、「自分の存在価値が認められている」、「自分の意見やアイデアが聞き入れられる」状態を指します。ダイバーシティ推進の目的を達成し、競争優位性を高めていくには、常日頃から、国籍や性別、役職等にかかわらず、安心して発言できる「インクルージョン」の状態をつくり出すことが不可欠です。

#### 受講者の声

- ・インクルージョンがあって初めて仕事も人間関係も回ることに気づいた。
- ・異文化と聞くと心に壁をつくりがちだが、実は普段の業務に直結したことが多いと実感した。

### 本社地区研修センター「JSR六本木倶楽部」オープン

2013年1月、本社地区の教育・研修や社内外コミュニケーション向上の場として「JSR六本木倶楽部」をオープンしました。これまで、工場地区では技術伝承や人材育成のための研修施設を設置してきましたが、これにより工場地区と本社地区に研修施設が完備するとともに、当社グループの行動指針である4Cのひとつ「コミュニケーション」向上を図る仕掛けが整いました。



2階大会議室



研修センター「JSR六本木倶楽部」

## 社会

### 生物多様性に配慮した事業所の土地利用

当社では、「企業と生物多様性イニシアティブ®」（JBIB）が開発した、「いきもの共生事業所®推進ガイドライン」を活用して、事業所緑地の生物多様性の評価と、緑地の改善を進めています。2012年度は、四日市工場および筑波研究所における改善計画を策定しました。四日市工場では、今後の取り組みの検討に必要な基礎情報を集めるため、大学研究員、専門家と社員が連携して、工場内および工場周辺の緑地のいきもの調査を実施しました。その結果、工場内には鳥や昆

虫、メダカなど、予想以上に多くの生物が生息していることがわかりました。今後も、各事業所で定期的に社員による調査を行っていきます。

また、2012年9月に閣議決定された「生物多様性国家戦略2012ー2020」の中で、当社がメンバーとして開発に携わった、JBIBの「いきもの共生事業所®推進ツール」が社有地の管理手法として紹介されました。このような活動を通じて自社のみでなく産業界や社会全体への貢献も目指していきます。



四日市工場でのいきもの調査

#### 東北大学生態適応 GCOEフェロー（当時） 岩淵翼氏



工場という孤立した環境にもかかわらず、多くの生物がいることに感心しました。果樹の植樹や小川の岸の整備により、より生物多様性に配慮した土地利用が可能になると思います。

（現・東洋大学生命科学部助教）

### リスク管理システムの改善

JSRグループでは、2009年度より毎年定期的に、全部門・グループ企業において、爆発・火災、大規模地震、パンデミック発生をはじめ、多岐にわたるリスクについて洗い出し・評価・対応策の策定を行い、特に重要なものについては全社重要リスクと位置づけて、リスク管理委員会およびCSR会議が改善状況を管理しています。2012年度は、外部の専門家を活用してこのシステムのレビューを行い、管理体制を強化しました。

### 次世代育成・教育分野における取り組み

#### ●理科出前授業の開催

事業所のある地域の教育委員会と連携して、近隣の小中学校で理科の出前授業を定期開催しています。2012年度は、四日市市をはじめ、筑波研究所のあるつくば市、鹿島工場のある神栖市でも出前授業を開催し「子どもの理科離れ」の改善に向けて微力ながら取り組んでいます。

#### ●海外からのインターン生の受け入れ

従来より、日本の大学生のインターン生を受け入れていましたが、2012年度は海外からのインターン生を受け入れました。



米国  
ワシントン州からの  
インターン生

## 株主

### 基本的な考え方

当社は、長期的視点に立って研究開発の強化に努め、新たな事業展開により企業の競争力強化を図り、会社の業績を長期的に向上させることが最も重要な課題であると考えています。

また、信頼され魅力ある企業体質の構築を目指し、コーポレートガバナンスの強化充実に取り組んでいます。

独立した立場の社外取締役と社外監査役を選任することで、経営の透明性、健全性を高めるとともに、経営の監視・監督機能の強化を図っています。

### 株主・投資家とのコミュニケーション

IR活動を通して、株主・投資家に経営状況と会社の方針について迅速かつ正確にお伝えするよう努めています。

定時株主総会では、早期開催、株主総会招集通知の早期発送、インターネットによる議決権行使の採用などを実施し、株主の議決権行使を円滑にしています。

四半期ごとの決算説明会、機関投資家・アナリスト向けセミナーおよび技術セミナー（JSR Techセミナー）の開催など、幅広く双方向のコミュニケーションを図っています。



JSR Techセミナー



目標と実績

JSRグループでは、各カテゴリーにおいて長期的な推進項目と年度ごとの目標を設定しています。  
主要な活動目標と実績についてご報告します。

評価 ◎:計画以上に進展 ○:計画通り進展 △:さらなる努力が必要

| 推進項目   | 2012年度目標            | 2012年度実績   | 評価 | 2013年度以降の目標  | 推進部門          |
|--|---------------------|--|----|--|---------------|
| CSRマネジメント<br><br>活動の推進および<br>グループ全体での<br>浸透度向上<br><br><br><br><br><br><br><br><br>ISO26000<br>組織統治 | 4委員会活動の推進           | ●4委員会活動（企業倫理、レスポンシブル・ケア、リスク管理、社会貢献）を計画通り推進   | ○  | ●活動の継続   | CSR部          |
|  | グループ全体での浸透度向上       | ●「CSRレポートを読む会」のグループ全部門での開催、社内報やイントラネットでのトップメッセージを含む発信増加等、社員のCSRの理解の向上を促進。各種アンケートで効果確認<br>●グループ企業のリーダークラスを対象にCSRワークショップを開催<br>●海外拠点の浸透活動に着手 | ◎  | ●メッセージの発信継続<br>●ワークショップなど意識浸透策の継続実施<br>●海外拠点への展開       |               |
|  | 社会動向の把握             | ●GCのネットワークを活用し、施策に反映<br>●ジャパネットワーク（GC-JN）の分科会推進委員会メンバー、社内浸透分科会幹事、ヒューマンライツ分科会メンバーとして活動  | ○  | ●活動の継続   |               |
|  | コンプライアンスの強化         | 企業倫理意識調査   | ○  | ●活動の継続   | 企業倫理委員会       |
|  |                     | 企業倫理要綱の周知化   | ◎  | ●企業倫理要綱の改定内容の周知化<br>●サプライヤーホットラインの導入                   |               |
|  |                     | 法令遵守の推進  | ◎  | ●活動の継続<br>●法令遵守体制の改善                                   |               |
|  | リスク管理の強化            | リスク管理の仕組みのレビューおよび改善  | ○  | ●改善策の実施および定着   | リスク管理委員会      |
|  |                     | 全社リスク管理システムの定期実施   | ○  | ●活動の継続   |               |
|  |                     | クライシスマネジメント  | ○  | ●BCM規定の整備<br>●危機管理訓練の継続実施                              |               |
|  |                     |  |    |  |               |
| 顧客・取引先<br><br><br><br><br><br><br><br><br>ISO26000<br>環境<br>公正な事業慣行<br>消費者課題                       | 製品品質の継続的な向上         | PLP <sup>※1</sup> 活動の展開と強化   | ○  | ●設計から製造までにとどまらず、原料調達から物流までのサプライチェーン全体にわたる品質管理の向上       | RC推進委員会       |
|  | 製品に対する環境・安全情報の提供    | 顧客への環境・安全情報の提供   | ○  | ●活動の継続   |               |
|  | 化学物質管理の充実           | GHS <sup>※3</sup> への対応   | ○  | ●法規に従いGHSに基づくラベル表示、SDS提供を継続。輸出品についても各国の法規制に従いGHS化に適時対応 |               |
|  |                     | 欧州REACH <sup>※4</sup> とCLP <sup>※5</sup> への対応  | ○  | ●活動の継続   | 原料機材調達第一部・第二部 |
|  |                     | グリーン調達 <sup>※6</sup> の推進   | ○  | ●サプライチェーンでの連携を重視した活動の推進                                |               |
|  | CSR調達 <sup>※8</sup> | CSR調達の拡充   | ○  | ●活動の継続、内容の拡充   |               |
|  |                     |  |    |  |               |
| 従業員<br><br><br><br><br><br><br><br><br>ISO26000<br>労働慣行<br>人権                                      | ワークライフマネジメント推進      | 意識浸透策の推進   | ○  | ●活動の継続   | 人材開発部         |
|  |                     | 制度の認知度向上施策の実施  | ○  |  |               |
|  | 人材の多様化              | 社内風土の醸成、具体的施策の実行、数値目標レベルへの到達   | ○  | ●活動の継続   |               |
|  |                     | 採用の多様化推進   | ○  | ●採用の多様化推進<br>●ワークショップの実施拡大                             |               |

※1 PLP (Product Liability Prevention) 製造物責任予防。欠陥製品を製造しないための予防活動  
※2 SDS (Safety Data Sheet) 安全データシート。化学物質の安全情報を記載したシートで、他の事業者に出荷する際に添付する  
※3 GHS (Globally Harmonized System of Classification and Labelling of Chemicals) 化学品の分類および表示に関する世界調和システム。化学品の分類、ラベル表示、SDS提供を世界的に統一する仕組み  
※4 REACH (Registration, Evaluation, Authorisation and Restriction of Chemicals) 欧州の「化学品の登録、評価、認可および制限」の規則で、年間1トン以上製造・輸入する化学品はすべて安全性試験データをつけて登録する制度

※5 CLP (Classification, Labelling and Packaging of substances and mixtures) 欧州における、GHSに基づく化学物質と混合物の危険有害性分類、表示および包装に関する規則  
※6 グリーン調達 人の健康に悪影響を及ぼす可能性のある物質の管理を徹底できている調達先から原材料などを調達する仕組み  
※7 JAMP-GP (Joint Article Management Promotion-consortium Global Portal) アーティクルマネジメント推進協議会のグローバルポータルサイト。会員企業間の製品含有化学物質の情報管理・開示・伝達の機能を持つ  
※8 CSR調達 環境対応のほか、企業倫理や雇用など社会面での取り組みも実践している調達先から原材料などを調達する仕組み



| 推進項目     | 2012年度目標             | 2012年度実績  | 評価   | 2013年度以降の目標                           | 推進部門   |         |
|----------|----------------------|---|--|---------------------------------------|--|---------|
| 社会RC     | 環境・安全に配慮した製品の開発      | LCA※9の環境負荷低減活動への活用  | ●研究開発段階よりLCAを導入し新規製品、代表製品のCO2排出量を試算（約70製品群の製造段階のLCAを試算）  | ○                                     | ●LCI※10データの環境負荷低減活動への活用検討を継続                               | RC推進委員会 |
|          | 事故・災害の撲滅             | 事前環境・安全評価の実施  | ●設備新增設・変更、非常作業等の実施に際しては安全・環境マニュアルに従い、事前環境・安全評価の実施を継続<br>●2012年度は、石油コンビナート等災害防止法に基づき行政に報告すべき設備災害が2件発生。グループ全体に水平展開し、問題点の洗い出しと対策を実施   | △                                     | ●現状の設備、物質、作業等について潜在危険の発掘とその対策を継続                           |         |
|          |                      |   | ●労働安全衛生災害防止のため、危険箇所・危険作業の撲滅活動等を継続。2012年度はJSRおよび国内グループ企業での休業災害発生なし  | ○                                     | ●職場の危険箇所、危険作業撲滅とともに、技術の伝承を推進                               |         |
|          |                      | 大規模地震対策の計画的推進   | ●直下型地震を想定した耐震補強、プレート境界型地震に伴い襲来する最大津波を想定した対策等の計画立案と推進   | ○                                     | ●中期計画に沿って対策を推進   |         |
|          | 信頼感の高い事業所づくり         | ISO14001、ISO9001の維持   | ●JSRの3工場でISO14001、ISO9001の継続審査に合格  | ○                                     | ●ISO14001、ISO9001維持・継続<br>●筑波研究所でISO14001導入                |         |
|          |                      | 保安関係法令認定の維持・継続  | ●JSRの3工場で高圧ガス保安法認定維持<br>●千葉工場において、高圧ガス保安法の一圧容器4年間連続運転取得  | ○                                     | ●保安関係法令にかかわる認定の更新  |         |
|          |                      | グループ企業の環境・安全監査  | ●国内グループ企業（13社、22事業所）および海外グループ企業（1社、1事業所）を対象に環境・安全監査を実施   | ○                                     | ●活動の継続<br>●海外拠点監査の実施頻度アップ                                  |         |
|          |                      | 保安力向上センター活動への参画   | ●「保安力評価システム」の産業界への普及を目的として2013年4月に第三者機関として設立された「保安力向上センター」の活動に参画   | ○                                     | ●活動の継続   |         |
|          | 環境負荷の低減              | 省エネルギーの推進および地球温暖化対策   | ●省エネ技術の高度化に取り組み、「3工場トータルの二酸化炭素排出量を1990年度対比6%削減体制」を確立。2012年度の排出量は1990年度比約1.6万トン(2.2%)減少。二酸化炭素排出量原単位指数は1999年度を100とした場合、2012年度は63を達成  | △                                     | ●二酸化炭素排出量削減目標達成のため、省エネ活動を中心に継続                             |         |
|          |                      | VOC※11大気排出量削減   | ●JSRの3工場に設置したRTO※12の安定運転を継続することにより、VOC排出量を2000年度対比76%削減  | ○                                     | ●2015年度のVOC削減目標「2000年度基準75%削減維持」に向けて推進                     |         |
|          |                      | 排水環境負荷、産業廃棄物等の削減推進  | ●産業廃棄物に関しては、廃棄物の発生抑制、廃棄物分別の徹底、再資源化先の探索等に全工場一体となって取り組み、2003年度から2012年度まで継続してゴミゼロの目標を達成（最終埋立処分量7トン/年）<br><br>●排水（COD、全窒素、全リン）について第6次水質総量規制に対応<br>●第7次水質総量規制（2014年4月施行予定）に向けて排水処理安定化と水質向上対策を継続<br>●改正水質汚濁防止法への対応完了（JSR各事業所、対象設備を有するグループ企業において遵法対応完了） | ○                                     | ●ゴミゼロの目標達成の継続<br><br>●第7次総量規制に対応するため、排水処理安定化とさらなる排水負荷低減を推進 |         |
|          |                      | 地域環境改善の実施   | ●JSRの3工場に設置したRTOによる臭気削減継続<br>●四日市工場に設置したグランドフレアー※13による騒音・遮光対策実施。2012年度は環境苦情なし  | ○                                     | ●環境苦情ゼロの継続   |         |
| ISO26000 | 環境                   | 国際事業における環境・安全の確保  | ●公益財団法人 国際環境技術移転研究センター（ICETT）に協力し、世界各国の環境・安全技術者の養成を支援  | ○                                     | ●ICETTへの協力継続   |         |
| コミュニティ   |                      |   | ○  | ●ICETTへの協力継続                          |  |         |
| 社会       | 生物多様性保全              | ●四日市工場、筑波研究所で生物多様性に配慮した緑地への改善に着手。各事業所で定期的に「いきものモニタリング」実施<br>●新規建設事業所での生物多様性配慮の検討に着手<br>●サプライヤーへの生物多様性保全に関するアンケート実施<br>●合成ゴムおよび天然ゴムの持続可能性調査実施<br>●JBIBのワーキンググループ活動継続                                   | ◎  | ●方針・計画に則った活動の推進<br>●JBIB活動の継続         | CSR部<br>環境安全部  |         |
| 社会       | 地域・社会                | ●教育機関との協業による小学生向けの「おもしろ実験教室」、中学生向け理科の出前授業、教員の民間企業研修、TABLE FOR TWO等を継続して実施<br><br>●被災地の仮設住宅に当社材料を使用した遮熱塗料の施工を継続し、被災者の生活環境の改善を支援<br><br>●各工場地区において地域住民との交流行事、周辺の清掃活動など対話を重視した活動を展開。四日市工場食堂での「地産地消フェア」継続 | ○<br>○<br>○  | ●活動の継続<br>●被災地のニーズに沿った活動の継続<br>●活動の継続 | 社会貢献委員会  |         |
| 株主       | 各種媒体による情報発信          | ●ホームページの「投資家情報」、アニュアルレポート、冊子「こんなところにもJSR」等により、当社グループに関する情報をわかりやすくタイムリーに発信   | ○  | ●活動の継続                                | 総務部<br>経理財務部<br>広報部  |         |
|          | 株主・投資家との双方向コミュニケーション | ●四半期ごとの決算説明会に加え、機関投資家・アナリスト向けセミナー、技術セミナーおよび工場見学会を実施   | ○  |                                       |  |         |
|          | 親しみやすい株主総会の実施        | ●招集通知添付書類への記載情報の充実、株主総会当日の製品紹介・事業概要の説明を充実   | ○  |                                       |  |         |

※9 LCA (Life Cycle Assessment) 製品について原料、製造、使用、廃棄の全工程で、環境に与えた影響を定量的に分析・評価する方法  
 ※10 LCI (Life Cycle Inventory) LCAにおいて、製品に関して、資源、エネルギー、環境負荷の入出力データを積算すること  
 ※11 VOC (Volatile Organic Compounds) 揮発性有機化合物質。大気汚染の原因になる

※12 RTO (Regenerative Thermal Oxidizer) VOCを燃焼させ水と二酸化炭素に分解する装置で、よりクリーンな排気を実現する  
 ※13 グランドフレアー 地上置き の円筒状炉内で燃焼する形式の排ガス燃焼設備で、通常のフレアースタックより騒音等周辺環境への影響が少ない  
 ※14 JBIB 一般社団法人 企業と生物多様性イニシアティブ (Japan Business Initiative for Biodiversity )



# 社外からの評価

## SRI指標への組み入れ 当社のCSRに対する取り組みは、国内外で高く評価されています。 (2013年6月30日現在)



2012年9月、社会的責任投資（SRI）として世界でもっとも影響力のある指標のひとつである「ダウ・ジョーンズ・サステナビリティ・アジア・パシフィック・インデックス（DJSI Asia Pacific）」に初めて選定されました。



2010年12月より、国際的なSRI指標である「Ethibel Pioneer & Excellence」に、日本の化学セクターで唯一選定されています。



2009年9月より、日本国内の代表的なSRI指標である「モーニングスター社会的責任投資株価指数」にも選定されています。



2013年4月、「FTSE4Good Index Series」の組み入れ銘柄として10年連続で選定されました。

その他、「社会的責任経営の進んだ企業」（日本総研）に選出されています。

## 第三者意見

東京大学 名誉教授

安井 至氏



今年のCSRレポートを手にして、まず、小柴社長のトップコミットメントを読むと、その経営の意図がやはり極めて明確であることが確認できる。ところで、現在の日本という国には、自分はこの目標にしてこの地球上でこう生きたいという意図が明確な人は極めて少ない。せめて、企業のトップにはこれを求めたいと思う。そんな話を今年の「社会との対話」でも語らせていただいた。その裏には米国のGEの話を聞く経験があったからである。現在の社長Jeffrey R. Immelt氏が前社長Jack Welch氏の後継になったのは、2000年のことである。1956年生まれで若い。それもそのはずで、社長の任期は15年を目処としているとのことである。それには、いくら遅くとも、50歳前後には社長に就任しなければならない。それは製造業としての長期的な成長を目指すためだという。

製造業、特に、材料系の企業の競争力を確保するには、長期的な視点に立って、研究開発能力を高く維持しておくことが必要不可欠である。しかし、研究開発は100%成功するとは限らない。一方、長期的に技術的能力を拡大することは、材料メーカーの社会的責任（SR）でもあるので、まずはユーザーズの的確な把握が鍵となる。当然、国際的な対応が絶対的な必須事項である。

当然、リスクもある。世界全体を把握することは、一個人では困難で、しかし、なんらかの判断を下すのはやはり個人でしか

いからである。この課題は、本社の意図を最大限汲み上げる努力が行われるグループ体制を構築し、情報ネットワークを確立することによって、初めて克服できることだろう。

グループ体制がしっかりと確立している証拠の一つは、米国のJSR Micro, Inc.が本社に触発されて、『CSR Report』を発行したことはないだろうか。SRI指標への組み入れも一つの目安になる。Dow Jonesのサステナビリティ・アジア・パシフィック・インデックスに2012年に選定されていることは、現在のグループ体制が正当に評価されていることを意味するだろう。

生物多様性にもすでに取り組む、日本の化学企業として、CSRの先頭を走るJSRであるが、後続に抜かれないために何をすべきなのだろうか。それは、まずもって本業での、すなわち、材料系製造業としてのCSRを再度確認すること、そして、より体系化された分かりやすい取り組みを目指すことであろう。

先頭を走っているという場合、外部から何かを学ぶことは無意味である。材料イノベーションを実現すると同様の方法論を、CSRのために社内で開催しなければならない。野中郁次郎著『知識創造企業』で指摘されていることであるが、それには、まずは場をつくり、そこで濃い会話を繰り返し、そこで表出してくる知恵を構造化し、そして広く一般に理解可能な形式知へと変換する。このような手法を継続することではないかと考える。

# JSRグループ概要

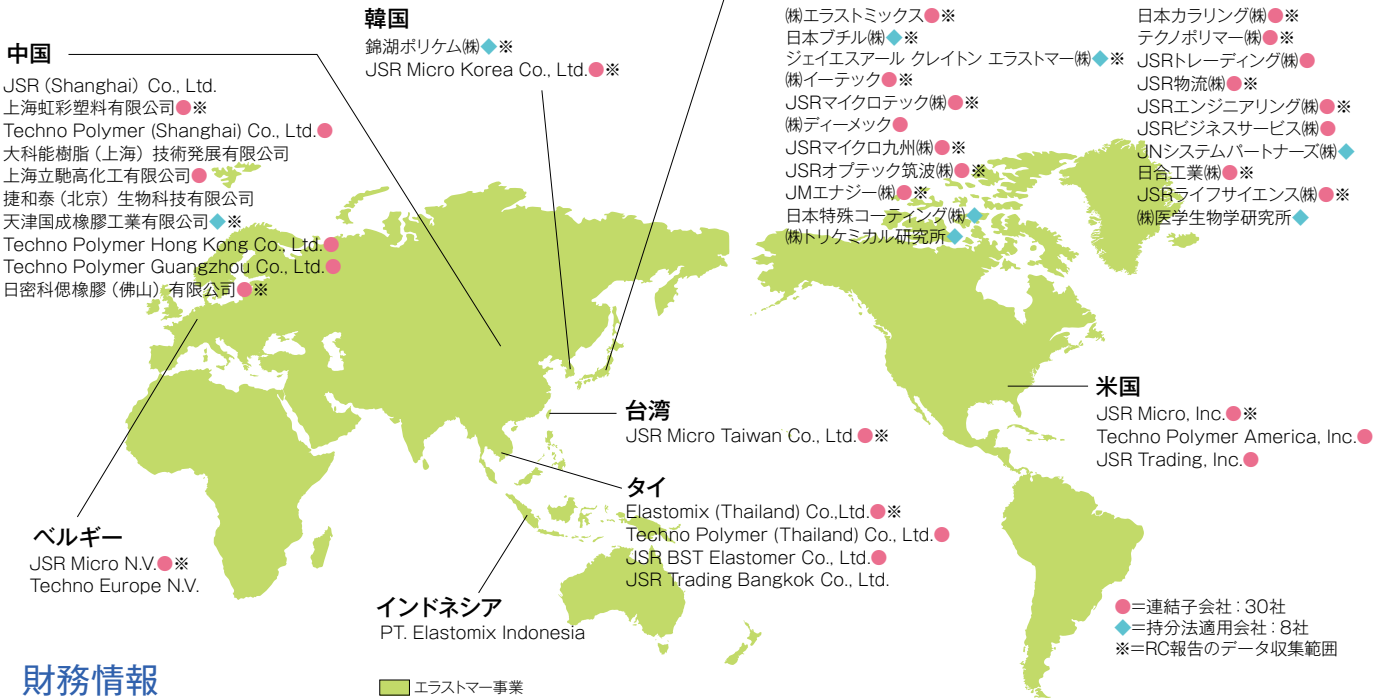
## JSR概要 （2013年3月31日現在）

|       |   |
|-------|---|
| 会社名   | JSR株式会社   |
| 設立    | 1957年12月10日   |
| 本社所在地 | 東京都港区東新橋一丁目9番2号 汐留住友ビル  |
| 取締役社長 | 小柴満信  |
| 資本金   | 233億円   |
| 従業員数  | 2,474名（単独） 5,659名（連結）   |
| 事業内容  | 石油化学系事業<br>（エラストマー・エマルジョン・TPE・合成樹脂）、<br>電子材料、ディスプレイ材料、光学材料、<br>精密材料・加工、環境・エネルギー、<br>メディカル材料 等 |

## JSR事業所一覧 （2013年6月30日現在）

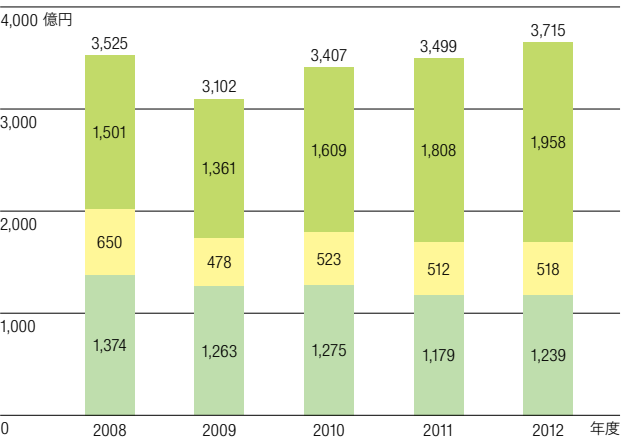
|      |  |
|------|--|
| 工場   | 四日市工場（三重県四日市市） 千葉工場（千葉県市原市）<br>鹿島工場（茨城県神栖市）  |
| 研究所  | 四日市研究センター（三重県四日市市）<br>○機能高分子研究所○ディスプレイ研究所○精密電子研究所<br>○先端材料研究所<br>精密加工センター（三重県四日市市）<br>筑波研究所（茨城県つくば市） |
| ブランチ | 名古屋ブランチ（愛知県名古屋市）   |
| 営業所  | 九州営業所（佐賀県佐賀市）  |
| 海外   | スイス支店／台湾事務所／シンガポール支店   |

## JSRグループ一覧 （2013年6月30日現在）

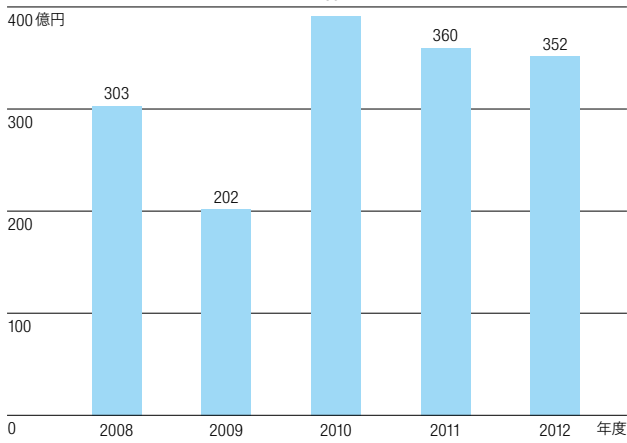


## 財務情報

### 売上高（連結）



### 営業利益（連結）







## 表紙について

JSR四日市工場には、敷地中央を東西に走る小川が流れています。2012年9月、この小川を含めた工場敷地での生き物生息調査を、専門家とともに社員が実施。さまざまな昆虫や鳥、小川にはメダカの生息も確認されました。今回の表紙では、生き物とともにある工場のイメージをイラストでお伝えしています。



Materials Innovation



可能にする、  
化学を。

JSR株式会社

CSR部

東京都港区東新橋 1-9-2

汐留住友ビル 〒105-8640

Tel: 03-6218-3518

Fax: 03-6218-3682

<http://www.jsr.co.jp>



この印刷物に使用している用紙は、森を元気にするための間伐と間伐材の有効活用に役立ちます。